

トホームに立つと謂ひ得るのであるが、たゞ前者は之に徹底せんことを期するに反して、後者は之と個人主義的なる自由主義とを適當に調和することに努むる點に於て、兩者間に少からざる實際的な相違がある。

仍て少しく社會主義思想に就いて致へて見るに、社會主義には幾多の流派ありとはいへ、すべて此等に共通なる所のものは、社會組織と社會生活の實狀とに對して現狀を批評すると共に之を改革して一の社會的に完全なる共同組織を造り上げ、特に經濟組織と經濟生活とに關する社會本位的なる共同主義を實現せんことを期するものであつて、古典派經濟學の主張するが如き自由主義を克服し、分化されたる個人主義的社會の代りに有機的に組織されたる團體主義を置代へんと欲する。そして其の爲めには精神文化的な生活方面と物質的生活方面とを同時に改革する必要ありとし、殊にマルクス主義の如きに在つては後者に重きを置き、社會生活の物的基礎が革まれば精神生活方面も當然に因果的に變はるものと見るやうな次第である。そして社會主義者が現代經濟生活を變革せんとするに就いては、現代の經濟が個人の自由活動を本義とし其の活動

社會主義
考に共通な

は生産方面と消費方面とに於て共に自由であつて、それ等はすべて市場中心に行はれ、然かも其の市場なるものは所謂自由市場であつて、何等之に對する社會的統制の行はれず、たゞ其の自然的なる統制しか存しない所に特色を有して居る爲めに、社會經濟は自ら無秩序に流れ、種々の弊害が其間から發生し、社會生活の本義に戻ることになるのを、甚だ以て不可なりとするのである。従つて其の改革を行ふに就いては、(一)其の市場なるものに對する社會本位的な統制を行ふこと、(二)個人活動を制限し分配の基礎たる所有制を廢止若くは制限し、社會經濟の構成に對する個人的なるイニシアチヴをも廢止若くは制限すること、(三)個人主義的な競争制から單一的な社會經濟制に進み行き、強者の生存確立制から各人の生存保障制に進入する爲めに、社會的なる生産力を増加して之を可能ならしめんとすること、(四)經濟に關する中央集權的な制度を樹立し、生産分配共に其の統制の下に行はれしめんとすることなどを以て、改革運動の眼目と爲す次第である。

然し斯く論ずるに就いても、やはり社會主義は其の流派に依つて此等の點に

關してすら其の根本の理由とする所も多少異り、其の運動方針にも少からざる逕庭があるから、以下主としてマルクス主義に就いて其の立場を明かにしてみよう。尤もマルクス主義の本質に關しては見る人に依つて多少所説を異にし、マルクス自身の書いたものでもその解説は必ずしも歸一するを得ないから、茲では普通に説かれて居る所に従つて之を述べるに止めて置く外はない。然かも其の記述の目的とする所は社會政策の立場との比較を明かにすることに存するは勿論のことである。そして記述は大體 M. Bauermeister の説く所に従ふことにすることを明かにして置くのが、誤解を避ける爲め便宜であると思はれる。(Die russische Kommunistische Theorie und ihre Auswirkung in den Planwirtschafts-versuchen der Sowjet Union, jena 1930)

マルクス主義以前に行はれたる社會主義主張の最も有力なものは所謂ユーロピアン・ソシアリズムであつた。此派の社會主義は其名の示すが如く殆んど純粹な理想抽寫であつて、方法的な社會哲學的な理論構成を缺いて居た。即ち一種の社會的倫理觀から出發し、理想的社會状態を想定して其の實現を期せ

マルクス主義所説

ユーロピアン社會主義

んとするものであつた。然るに科學的社會主義と稱せらるゝもの特にマルクス主義は斯かる理想的標的を想定せず、又人々の意思的行動に依る其の實現を期待することなく、努めて學問的な立場に立ち歴史の客觀的發展法則を確立せんとするものである。そして其の發展法則は意思的行動に獨立してそれ自らを妥當せしめる性質のものであると爲し、従つて恣意を否定し、自然的必然性を認めんと欲した。尤も此派社會主義と雖も人の意思的な働を認めないものではないが、それは絶對的な自由意思に依るものではなく、法的に限定されたるものに依ると信ずるのである。即ち人々は歴史の發展過程に於ける其の任務を認識して、之を充たすべく行動すべきものだと思はるのである。

人も知るが如く、マルクスは斯かる特色を有する社會主義理論を建設するに就いては、經濟的唯物史觀を以て其の基礎と爲したのであるが、併しそれは認識論的な唯物觀ではなく、たゞ社會哲學的な因果率とすることが眼目であつたに過ぎない。即ち社會は經濟事情の變化に依つて動くもので、社會の進展は精神的理由よりも經濟的理由に依つて行はれると見ることに重點が存するのだが、

經濟的唯物史觀

マルクスが斯くの如く經濟の基礎的決定性を認め、社會生活に對して經濟に依る一種の決定觀デターミニズムを説いたのは、主觀的には、理論建設に關しては現實なるもののみ承認し、立證し難きものは之を排斥せんとする彼れの性向が其の理由を爲して居るであらうが、客觀的には又彼が生存して居た時代は經濟が發達して社會生活の全面を掩はんとする觀のあつた時代であつたことも、其の理由を爲したのを否み難いであらう。

辯證法

何れにしてもマルクスの社會哲學は一種獨特のものであつて、其の理論には歴史的過程が其の中心を爲して居る。個々の社會的現象は其の過程からしてのみ甫めて意義を有ち得るのであつて、換言すれば、それが歴史的過程と關係を有する點に於て意義あるものとせられる。そしてマルクスは歴史發展の法則を考へ社會理論を説くに當つては、一種の辯證法を用ひたのであるが、それは又唯物的辯證法若くは經濟觀的辯證法と名づけ得べきものである。即ち社會の發展は經濟に於て其の衝進力を見出し、其の衝進力は辯證法的な發現形式を取るものと考へたのである。

社會の上層構造と下層構造

マルクスの所謂唯物的若くは經濟的歴史觀に依れば、社會生活は物質的なる下層構造と精神的なる上層構造とに依つて造られて居るが、現實なる經濟的基礎建築の方に社會生活を進め行く力があり、下層構造が上層構造を決定し、經濟的生産力のダイナミックが社會的進化を促進せしめる。そして社會が辯證法的に發展して行く其の過程は、若し唯物的決定論を徹底せしめるならば、客觀的に必然的であつて、人々の意圖に依つて自由に之を左右することは許されないわけで、意識が積極的な働を爲す場合に於ても、それはたゞ其の主觀的な動機例へば其の利益とする所が進化の客觀的過程と一致する限りに於て自由であるに過ぎないことになる。即ち其の歴史的使命を認識し意圖的に之を實行する限りに於て自由であるに過ぎないことになる次第である。斯るが故に其の見地の下に議論を進めるといふと、やゝ器械論的な性質を帯ぶることになり、現時の經濟が現時の文化的な又精神的な實在を決定するが如くに、將來のものも亦斯くの如く決定せられるのみならず、同様な必然さを以て將來の經濟は現在の經濟から表はれ出づるわけである。

今その發展過程を見るに、從來の總べての歴史は經濟的範疇である所の階級間の闘争の歴史であつて、社會的な軋轢は經濟的事情にのみ基礎を置いて居る。將來とても亦あらゆる社會的な現象は階級闘争に於て實現する筈であつて、此の過程の完成と共に階級なるものが經濟的範疇たることを止め、それと共に社會的不一致の總べての原因が除去せられる迄は其の過程は續くものである。

元來社會構成の上から之を見て、所謂上層構造は下層構造と調和すべきものであるけれども、後者は常に變化し行くものなるが故に、凝結することを常とする所の上層構造はそれに伴つて改造されなければならぬ。社會的平衡はいつも革命的な生産力に依つて攪亂せられるものであつて、其の事は常に新たな政治的並びに社會的變革を誘致する。されば社會的還境は進歩して休むことを知らない所の經濟關係に適合せしめられることを要し、之に依つて毎に新しい基礎の上に一つの均衡の取れた状態を造り出さなければならぬのである。然るに其の均衡状態は又再び經濟的な新變化に依つて覆され、更に新たな社會秩序に其地位を譲らなければならぬ。

下層構造
の進化

時代的適
合と變化

資本主義も曾ては進化の階段に適合した社會秩序であつた。即ち市民的な革命に依つて從來の封建的束縛が解除せられ自由經濟制が樹てられた當時に於ては、たしかにさうであつた。然るにその市民的革命は階級關係をば存続せしめ、たゞそれを新らしき現實に適せしめるに過ぎなかつた。所が此の新らしい基礎の上に於て生産力は再び驚くべき勢を以て進展し、古き生産状態下に於ては終に居るべき地を見出し得ざるに至つた。即ち私的な獲得(所得)は社會的な生産状態と調和しなくなり、然かも其の生産關係に於ては人格的要素は段々に影を潜めて物的化するやうになり、其等の矛盾は段々に大きくなつて、對立相反状態は益々其度を増し、結局資本主義の完成と共に生産力は其の柵である所の資本主義的生產關係を破つて、新らしい經濟關係を造り出すに至るものであるといふ風に觀察する次第である。

尙又マルクス主義者の主張する餘剩價値の理論は甚だ特色あるものであつて、階級的分裂に關する説明とも關聯して居る。即ち其の見る所に依れば、すべて財の價値は其の中に包含さるゝ社會的に必要なる勞働に等しく、其の測定

餘剩價値
論

單位を爲すものは労働時間である。そして労働それ自身も亦他の商品同様に其中に包含さるゝ労働に従て評價されるのだが、労働ばかりは自己の價値を再生産するだけの働を爲すに止まらないで夫れ以上の餘剩價値を生産するものである。然るに労働者自身は此の餘剩價値を獲得するを得ず、それは賃銀を可變資本として投資する所の企業者の獲得する所となり其の利潤所得を形造り、企業者は其の餘剩價値を利得することが其の投資の目的である。

所が世に競争の行はれる結果として企業者は生産費を切下げざる必要に迫られ、益々技術的改良を施し益々多く機械を使用することになり、従て可變資本に對する不變資本の比例が變つて來るのである。即ち可變資本は段々少く用ひられるのに反して不變資本は段々多く用ひられ、労働豫備軍は益々賃銀を壓迫することになる。そして終には生産過剰を齎らして、一般的な不景氣と恐慌とを招來することにもなる。

競争は大資本に依る大生産者の優越の爲めに小生産者を壓倒して、資本の集積と事業の集中とを結果する。斯くて少數の大資本主と多數の貧窮なるプロ

資本と事
業との集無産階級
の實
現の
階級

レタリアとが對立するやうになり、恐慌的窮迫は終に革命を喚び起し、資本主義は倒壊すると見るのがマルクス主義者の見解である。

そして革命の結果プロ階級が獨裁的支配權を獲得し、集積されたる資本と集中されたる生産とを社會有化して、社會的なをとして經濟的な矛盾のない新社會が建設せられると見るのである。

此の客觀的な經濟過程と併行して精神的上層構造のイデオロギイ的な進化過程が進行するのだが、ブルジョアジーは此の進化過程の中に居り乍ら其の進化の理法も實狀も知らない。然るに之に反してプロレタリアは能く之を知つて居り、歴史に依つて其の肩上に荷はされたる任務を遂行するものであると説く次第である。

仍て之を總括して攷ふるに、マルクス主義による社會發達の理論には三つの顯著なる特色が認められる。即ち其の第一は歴史的過程を支配する必然性であつて、鐵則的な必然性を以て資本は常に轉換され、技術的進歩は行はれ、集中は實現し、其の結果資本主義は倒壊して社會主義が實現すると見る點である。尤

概括

も此の必然性の嚴格さに至つてはマルクス主義の解説者の間に多少意見の相違あり、之を自然法則的に嚴格に解釋せんとするものと、稍々緩く解釋せんとするものがある。第二は、社会變遷過程は極めて單純に説かれてあるが、それは理論的な抽象に基いて然るわけではなく、事實そのものが理論の如く單純であるからで、思惟と實在とは同意義であるといふ點これである。(Was wirklich ist, ist vernünftig; was vernünftig ist, ist wirklich.—Hegel) 即ち資本制の進化過程中に自らに社会主義的要素が養成せられるのではなく、資本主義が成熟し完成すればそれは當然に崩壊して、それと同時に辯證論的に「反」の地位に在る所の(換言すれば辯證法的否定たる)社会主義が實現すると見るのである。其の第三は、經濟はたゞ其の一方側の働で以て上層構造を決定し、經濟が上層構造の方から反動作用的に影響を被ることはないといふ點である。經濟上の事情はそれ自ら獨立に進化發展の法則を有し、何等經濟以外の勢力の支配を受けない。併し精神的上層構造にも或程度の獨自性は存するのであつて、それは經濟方面の發展と歩調を合せないで進化するだけのことはある。もし此事がなかつたならば、精神方面

と經濟方面との矛盾、換言すれば上層構造と下層構造との不調和といふことは起り得ないわけで、従つて社会的不安状態も生じないことになる。要するに斯かる立場を取るものであるから、マルクス主義は將來出現すべき社会主義の組織や構造に就いては論じない。それはたゞ資本主義の反であることを以て足れりとする。資本主義經濟の進化に關する理論を以て社会主義を説く譯には行かないのである。従つてマルキシズムは意思的に設計して社会主義を造り上げんとする所の所謂社会化の觀念に就いては多くを語らない。來るべき共同經濟の本質や條件に就いて思索することなく、ただ現に實在するものに就いて研究するに止めんと欲するのである。けれどもマルキシズムはただ單に理論を説き宿命に靜座することを以て満足するものではなく、積極的行動を否定するものでもない。即ち共產宣言(Das kommunistische Manifesto)は積極行動のプログラムである。たとへ經濟的進化はそれ獨自行はれ、必然的に社会主義が實現するにしても、下層構造と矛盾するに至つた上層構造を何時迄も維持せんとする努力は必ず政治的に又社会的に存在するものであつて、法制

なるものの有する保守性は經濟進化の妨を爲すから、その障礙を實力に依つて取除いて法律政治の状態を經濟實狀に合致せしめる必要があると見るものである。この意味に於てマルキシズムは革命を肯定し、革命は進化の必然的な結果と見、前者は後者の理法を認識して其の過程を促進する働であると考へ、従つて革命は意識的に行はれるものであるが、併し決して恣意的に行はれ得るものではないと見る。

マルクス主義に於ける社會進化法則の必然性は、マルクス主義を純然たる唯物論的根據の上に立つものと見ると否とに依つて、其の解釋上に少なからざる相違を生じて來るわけであるが、マルキシズムの所謂唯物史觀なるものは前にも述べたやうに、認識論上の唯物論と同一視すべきものでないと同時に、マルクスが歴史の唯物的解釋と稱したのは、辯證法的方法論を採り乍らもヘーゲル流の唯心論又は觀念論と同一のものでなく、寧ろ反對の立場に立つことを明かにせんが爲めに過ぎないから、それは唯心論に對する唯物論といふ風に唱へたわけだが、實はより以上に觀念論に對する實在論の意味に於て立場の反襯せるこ

社會進化
法則の必
然性

とを示した方が妥當であつたかも知れない。此の意味からすればマルキシズムの歴史觀は實在論的若くは現實論的解釋 (realistic interpretation or realist conception) と名けた方がよいかも知れない (G. D. H. Cole, What Marx really meant, London 1934, p. 14)。

従つて其の社會發展に關する法則的必然性は自然科学的に嚴重な意味に於ける普遍妥當的なものでなく、たとへマルキシズムに於て「自然的必然的」(natur-notwendig)なる字句が用ひられようと、そこにはやはり人の意識的な働を入れる餘地のあるものだといふことを認めなければならぬ。若しそれが純自然科学的に必然的な法則に従つて進化發展するものであるならば、恣意ばかりでなく、苟も人の意識的な働による革命運動の如きものが有効に働き得べき餘地はなく、その行はれると行はれざるとに拘らず、變化すべきものは必然に變化することになる。そして革命運動に依つて其の變化を促進するといふことも無意義のことになつてしまふ次第である。革命已に然り、まして況んや社會政策などの如き立法及び行政手段に依る意圖的施設の容認せらるべき餘地は全然存

革命運動
の肯定否

しないことになるわけである。併しマルキシストは革命は社會進化の理法の認識の下に於て其の理法の實現を促進する爲めに行はるゝ限りは之を有効のものと認むること上述の如くであるが、たゞ所謂社會政策に至つては之を容認せうとしない。そしてそれは社會政策が意圖的のものであるから法則の必然性に撞着するといふ理由からよりも、寧ろ其の國家觀に於て、現時の國家組織は資本主義的經濟組織と相伴ふものと見、その資本主義組織の持續を否定する立場から同時に國家組織の存續を否定し、その國家なるものに依つて行はれるあらゆる政策なるものを否定せんとする理由よりして然るものなるを思はなくてはならぬ。即ち歴史發展の法則は、資本主義的國家組織を發展過程の一段階と見る外なからしめ、現實が其の段階を越えて進み行くと共に、所謂國家政策の行はれる時代は過ぎ去り行くものと見る次第である。換言すれば資本主義と國家組織とは既に其の歴史上に荷へる任務を爲し了へて、今や辯證論的に其の反位に在る所の社會主義に其の地位を譲るべき運命に在りと見る所から、あらゆる國家政策の持續を否定し、革命による社會主義實現過程の促進を説く次第

である。そして此等の見方と主張とが、現時の國家生活上より之を見て、最も危険視せられる所以でなければならぬ。

第十五章 ホルシェヴィズムと社會政策

マルキシ
ズムとホ
ルシェ
ヴィズ
ム

社會政策と社會主義との關係を攻へ特にマルキシズムに就いて觀察するからには、現時の實狀としては、どうしてもレーニンを中心とする露西亞共產主義者に依つて建設されたるホルシェヴィズムと社會政策との關係を見る必要である。マルキシズムとレーニズムとは同じ共產主義の理論範疇内に在つて極めて密接な關係を有し、後者は前者を基礎として發達し、共通の理論體系を形造ると見て必ずしも差支のないものであるが、然し同時に又兩者間にはかなり其の趣の異なる所もあり、マルキシズムが努めて唯物論的若くは實在論的基礎觀念に忠實ならんとするに對して、ホルシェヴィズムはやゝ近時の理想主義的な哲學の影響を受けたと覺ゆる點があつて、其の意味に於ては唯物論的見地が緩和されたと見ることが出來ると共に、前者が飽迄理論的であるのに反して、後者はたゞ共產主義に關する理論體系を形造るを以て満足せず、實行を重視し、社會革命の生きた理論であると同時に其の實行力たらんことを期して居る風

マルキシ
ズムとホ
ルシェ
ヴィズ
ムとの
異同

理論と實
行

がある。以下少しく其等の點に關して兩者を比較しながらホルシェヴィズムの本質を明かにして、社會政策上よりの觀察を試みて見たいと思ふ。

併しホルシェヴィズムに就いても其の解説は人に依つて多少づつ異り、完全に一致した説明は與へ難いから、やはり前章の例に従つて記述して行くことにする。(M. Bauermeister, —op. cit. S. 31fg. 参照)

マルキシズムに於ては既述の如く經濟的歴史觀が中心基礎を爲し、經濟は歴史の原動力であり、精神的上層構造は經濟的下層構造に依つて決定せられると見るのであるが、露西亞の共產主義に於ては、兩者間の辯證法的な交互作用を認めて居る。そして其の交互作用に依る兩者間の關係の中に歴史的進歩の推進力は存すると見るのである。

マルキシズムに於ては認識はたゞ現實の再生に過ぎないが、ホルシェヴィズムは現實よりも先づ認識を捕へて之を以て進化を能動せしめ、又之を促進する爲めの用具たらしめんとする。そしてホルシェヴィズムに在つては理論と實行との關係は知行合一的であつて、やゝもすれば理論は實行の事後的理由付け

に過ぎない観すらある。これはマルクス及び彼れの周囲の人々は自ら革命を行つたものではないのに反して、レーニン及び其の同志は自ら革命の衝に當り、千軍萬馬の間に馳驅して、先づ以て社会改造の實行に當り其の方が急であつて、先づ以てゆつくりと理論を考へ其の方式に従つて之を試験的に實行に移して見るといふほど悠長であり得ず、先づ行つて然る後に説明することの實際的な必要に追ひ立てられ乍ら進んで行つた事情に由る所多大でなければならぬ。

マルキシズムに於けるが如くポルシェヴィズムに於ても歴史的考察はあらゆる研究の中心點を爲して居る。進化は社会主義に到達し、其所で進化は完成せられ、社会主義のみが唯一の正當なるものであり又絶對に經濟的なる體系である。歴史的進化の觀點下に於てのみ個々の歴史的現象は判断すべきものである。即ち事物の本質は其の自然的にして物的なる實在に従つて見出さるべきものであるより、より以上に進化の過程に對するそのもの、關係に従つて見出さるべきものである。歴史的進化は過程の總體であつて、歴史的過程のみが唯一の實在範疇であると見る。

歴史觀

ポルシェヴィズムに在つては、理論は其上に實行が築かれる限りに於て認識に役立つ。そして理論は大衆を捕獲すると共に直ちに物的な實力と化する。然かも此の捕獲は決して偶然にはなく必然的に行はれるものである。されば理論は實行から成立つが如く、實行は又理論に働きかけるのであつて、兩者は同一なる歴史過程の兩面に外ならない。即ち理論は認識されない進化の認識されたる表現に過ぎないといへるであらう。

マルキシズムは進化を高唱し、事物の客觀的進行が眞に革命的な要素であるのだが、ポルシェヴィズムに在つては、認識の事物を變革する働が進化の支持者である。そして認識は唯單に、既に完成されたる進化を洞察するばかりでなく、過程を其の全貌に於て知得することに依つてそれは理論が之を示す所の將來の問題の解決となるのである。

マルキシズムに在つては、成熟といふことは客觀的な事實であるが、即ち經濟的集中の一定状態階段であるが、ポルシェヴィズムに在つては、革命的意思が成熟の表現である。成程その革命意思は經濟的過程から喚起されるものではあ

階級的自覺の重要

るが、然し又イデオロギー的な革命として經濟的過程に先行することが出来る。現在及將來に於ける現象の意義が一度認識せらるれば、此の認識を基礎として現實は歴史を完成せしめる爲めに變革せしめられ得るものと考へるのである。此の意味に於てホルシエヴィズムに在つては、階級的自覺に關する理論はマルキシズムに於けるとよほど異つた地位を取らねばならない次第で、階級的自覺と革命とは新たな意義と異つた任務とを有することになる。即ち外界の變革現實の變更は、もはや物それ自身の中に既に與へられたる進化の法則として宿る所のものが完成するといふだけの意味のものではなくなるのである。

認識若くは自覺が實行に對して有する叙上の意義と、理論が實行に對して有する叙上の關係とを明瞭に知ることによつてのみ、レーニズムの唯物辯證法の眞意義は理解することが出来る。

そこで更に致へて見るのに、現實を變革することの可能性は十分なる認識(自覺)といふことに繋がつて居るのだが、然らばその認識(自覺)なるものは何か。

經濟的唯物觀に従へば、社會は經濟的範疇であるから、資本制社會は資本制經

認識の意

無産階級の
のみ可能

濟に基礎を置く。然るに資本主と労働者とは生産關係に於て排列せられてゐるから、それは直ちに社會的意義を有する。又進化の發展に従つて階級關係は社會的關係となる。斯るが故に社會的認識(自覺)が經濟的認識(自覺)を基礎とする限り、其の認識は階級的な意味に於て經濟狀態から決定せられる外はなく、従つて認識とそれを基礎とする實行とは階級的自覺として成立つことになる。然かも階級的自覺なるものは或階級に屬する一定人の自覺ではなく、階級がそれ自身及びその社會的なそして經濟的な狀態に關して有する自覺でなくてはならない。即ち個々のプロレタリアの自覺ではなく、階級全體の階級的な自覺でなくてはならない。階級は其の所屬者の運命が一樣である所から、即ち各人皆一樣に其の全人格を以て市場に労働を賣らねばならぬ其の實狀から、之に關する全般的な共通的な自覺を可能ならしめるのである。併しそれはたゞプロレタリアート階級にのみ關することであつて、ブルジョア階級は斯様な全般的な階級自覺を得ることが出来ない。全體的な自覺といふことは其の本來の性質上から無産階級にのみ限られて居る。たゞ無産階級的自覺のみが同時に全

體を認識することが出来る。たゞ無産階級の生存条件のみからして全社會の組成に關する設備が考へ得られる。即ちたゞ無産階級のみが、其の客觀的として正しい自覺から、全社會をば此の利害關係に適當なやうに構成することが出来る。

階級的自覺の中に革命的行動に對する潜在的な正しい洞察が其の根柢を置く。然るに無産階級をして其の境遇に對する自覺に到達せしむるものは階級闘争である。階級の經濟的闘争と併行して社會的自覺の爲めの闘争が行はれる。そして階級闘争を動員する働きを爲すものは黨派であつて、組織の力に依りプロレタリアートの自覺をば客觀的可能性にまで高揚するのが其の任務である。

然るにマルキシズムに在つては、プロレタリアートを形造るものは、資本主に雇はれて働く所の勞働者、即ち所謂勞資關係を形造る勞働者の全體を意味した。之に反してレーニンは、未だ階級の單一性を備へて居ない露西亞の實狀に鑑みて、プロレタリアートの概念に新しい内容を與へたのである。即ち歴史的運動

プロ階級の構成

の實行者は働く人々の全體、換言すれば、僅かに生存を支へ得るか得ないかの状態に在り常に困窮に辛吟する所の都市及び農村の勞働者、貧困な又は極貧な自作及び小作農民の全體であるとしたのである。

尤も此の新階級は歴史的過程の主體としては、潜勢力を有するに過ぎないのであつて、事實上は都市の勞働者特には其の前營である所の共産黨勞働者が現實なる戰闘部隊であるとして居る。即ちレーニンは無産階級を三分類するのであつて、就中共産黨勞働黨が全活動力を集中し、歴史的創造に向つて喚び覺まし又押揚げるのである。即ち可能性の標準にまで其の自覺を高めるのである。そして此の自覺の發展こそは革命に向つての進化の成熟に對する目標であるとするのである。

以上の如く見來ることに依つてホルシエヴィズムの本質は概要之を窺知することが出来、又マルキシズムとの異同も略ぼ之を明にするを得る次第だが、尙ほ今少しく詳かに兩者の共通點と相違點とを述べて見ることは決して無益の業であるまい。

人も知る如くレーニンは自らマルキシズムの真正なる後継者を以て任じ、マルキシズムを日和見的な不純分子から醇化して、純真なマルクス教義を宣揚することを以て任とする考へた。然し乍ら革命に關するマルクス主義の見地は、レーニニズムに於ては一種特異な解釋を加へられて居る觀がある。マルキシズムに在つては、社會革命といふことは法制的な又政治的な上層構造を打倒することであると解し、それは經濟的な下層構造を變更することに依つて成就せられると考へるのに反して、レーニニズムに在つては、社會革命は法制的な上層構造をば、經濟的進化に適合せしめることに外ならない。従つてホルシェヴィズムは、革命といふことに就いては經濟方法(經濟の遣り方)に對する辛棒強い闘争を考へて居るのであつて、經濟秩序に對する闘争に重きを置いて居ない。

資本主義制下に於ては、社會主義的な經濟方法は唯だ其の外形的な經濟的技術的前提条件のみが存在し得るに過ぎないのであつて、其の經濟方法は資本主義制没落の後に於て自ら意識的に發展しなければならぬ。資本主義經濟の最高度に發達した形式でさへも、之を社會主義的組織に比すれば、經濟的にも相

違したものである。従つて社會主義的經濟方法は夫れ自らの働さで社會主義組織の中に含入されることもないし、又資本主義的社會の範圍内に於てそれ自らを法的に變化せしめることもない。

資本主義は既に封建的社會の内部に於て發達したものであつて、たゞその發達を十分ならしむる爲めに革命に依つて生産力を自由に解放することを必要としたに過ぎなかつた。そして此點が從來の市民的な革命と異なる點であつた。資本主義に對しては經濟的進化は眞實に革命的な要素であつたが、併しそれはたゞ變化すべき經濟方法に對して技術的なそして組織的な前提條件を齎らしたるに過ぎなかつた。そして市民的な革命は一撃の下に當時の經濟方法をば一の新たなる正しき法制的制度に變化せしめたが、社會主義的な革命は全社會の變革を企圖するもの、即ち單に經濟組織のみならず經濟方法の變革を企圖するものであることを忘れてはならない。

此種の變革を行ふには力(強制力)を要する。なぜならば、それは常に革命を行ふのみならず夫れ自身變革するものであり、そして此の總べてを包括する革命

は強制を必要とするほど左様に深く普通人の本能に逆ふものだからである。プロレタリアが権力を把握したといふだけでは、そして生産手段の廣汎に渡れる社會有が制度上に實現したといふだけでは、資本主義的な生産方法は排除掃蕩され得るものでない。それを排除し、意圖的な組織的な經濟方法をして取つて之に代らしめるといふことは、執拗な闘争に依て成就されねばならぬ。

然し乍ら、生産手段に對する所有關係が一度廢止されたる以上は、既に一の新經濟に對する可能性が與へられて居るといふことゝ、そしてそれはたゞ執拗な闘争と強制力とを以て強制し得られるといふことゝは、此派の人々の信じて疑はざる所である。即ち今や生産關係は之を強制的に變化せしむるを得、それを基礎として共產主義的な共同經濟の完成の前提を爲す所の一の新しい心的状態が発生し成長することになると見る。詳言すれば、新状態の下に成長する新時代の人々は、嚴格なる強制の下に於て社會的生活の規律に段々に慣れて來、終に共產主義社會の第一階段から次のより高き階段へ上つて行くべき門戸が開かれるやうになるまで、段々之に慣れて來ると見るのである。

強制の必要

力に關する見解の相違

此點に彼の科學的社會主義と云はれるマルキシズムとホルシェヴィズムとの大いなる相違が存する。即ち力なるものが歴史的な進化の中に在つて働くべき任務に關して大いなる見解の相違が存する。勿論マルクスも力に依る革命の考へを知らないではない。然し彼に在つては革命は進化と相並んで辯證法的な束縛裡に在る。自覺認識といふほどの意味が完成されたる進化の反映として革命的過程の最初の一步を可能ならしめる。力を以て打倒すべきものは、此の客觀的な進化過程に反抗する所の桎梏それである。然るにホルシェヴィズムに在つては、革命的な意思は辯證法的な束縛から解放せられ、イデオロギ一的革命は進化過程に先驅することが出來ると見んとするのである。

斯くて即ちホルシェヴィズムに在つては、實體的なならざる上層構造が下層構造に働を及ぼす可能性が認められるわけで、然かも前者は後者よりも先きに進み得るものであつて、經濟的進化を己れと共に引張つて行くことが出来る。

惟ふに斯くいデオロギ一的な革命の可能性を認め、經濟に對する精神的活動の能動性を認めるといふことが、人々をしてホルシェヴィズムをマルキシズム

イデオロギ的革命的な可能性

露西亞の
實況への
適合

ほど唯物論的若くは實在論的ならず、今少しく精神主義的なりと考へしめ、獨逸の新理想主義哲學の影響を受けて居るとか、レーニン其他露西亞人の東洋人的な所から來るものだとか考へしめる所以でなければならぬ。そしてホルシエヴィズムが階級的自覺なるものに重きを置き力を注いで、その自覺への到達を導き、大衆を鞭撻するに憂身をやつして居ることは、無産階級の重點を工場労働者のみに置かず農業労働者や貧農などを併せ取つて其の範圍を廣く定めんとする所と併せて、之れ全く露西亞の實況に鑑み、勞農大衆を革命的意識に糾合し教育し訓練し、依て以て社會革新の實行と持續と發展とを可能ならしめんとする實際上の必要より來るものでなくてはならない。後れたる露西亞の産業状態と階級構成と労働者心状とを以てしては、斯くするより外はなく、マルキシズムの金科玉條を守ることに於てたゞ考證的なる正確を期することは、到底實況のこれを許さざる所で、寧ろマルキシズムそれ自身の時代と實況とに應じたる進化を必要とした次第である。

社會政策
の實況

そして斯くの如き態度は常に實行の尊重といふことゝ相伴ふものなるが故

實況の
状態

に、所謂社會政策なるものも、資本主義國家に於ける妥協的施設としては觀念的に之を排斥するに拘らず、社會改造の實を行ひ行く途上に於ては、色々之を施し之を備へることの止むを得ざるものがあつた。即ち労働者の保護規定と保護施設とは之を行はざらんとするも能はざる所で、それはやはり一種の社會政策の實施に外ならなかつたのである。

試に其の實況を窺つて見やうならば、一九一七年に革命の行はれた時より一九二一年に至る所謂戰時共產主義の時代に在つては、何しろ共產主義を字義通りに實行しやうと企て、社會内に於ける階級的區別を一掃して、プロレタリアの存在のみしか認めないで、産業に關する一切の事は共產主義國家の手に於て直接に之を行はんとするものであつたから、從來個人主義經濟の基礎の上に認められたる各種の社會政策的施設は之を廢し、それに代るべきものは國家自ら之を行ふことゝしたのである。即ち例へば、社會保險の如きは元來保險といふ觀念が私人經濟を基礎としたもので、之を國家保險として行ふにしても、やはり私人をして掛込を爲さしめて不幸事に對する備を爲さしめ、國家は之を補助

戰時共產
主義時代

するといふ立前であつて、之を國營事業としても尙且つ其の私人經濟的な基礎性質が消滅するわけのものではないから、茲に共產主義制の實施せらるゝに至ると共に之を廢し、其の代り保險によりて救濟せらるべき事故に對しては、勤勞に従事するあらゆる人々を國家自ら救護することにした。そして勞働爭議の如きに對しては勞働組合や雇主組合の認めらるべき筈はないから、従つて和解調停等の制度の行はるべき餘地もなく、勞働者の團體は國家機關たる性質のものとなり、勞働條件はすべて國家的な規定として定められることになつた。就中特に賃銀に關しては、賃銀を以て勞働に對する報酬と見ることなく、勞働との對等價値を考へることなく、各勞働者の生活保障の意味に於て一定金額が給與さるべきものと見る所から、勞働者の能率、勞働の効果等には頓着なく大體均一額を給與することを以て原則と爲したのである。然かも勞働者は生活を保障される代りには社會に對し勞働に服する義務あるものとせられ、其の自由移動も禁止され、一般に勞働自由の原則を廢止し社會的勞働制を樹立する方針を以て進むこととせられた。斯くて此の戰時共產主義時代の終期に至つては貨幣

制をすら廢止し、國家の行ふ保健、交通、教育の範圍内に於ては無償原則を取り、一九二〇年十月國家の役人や勞働者に對しては實物給與制を布き、十人以下の勞働者を使用する小工業まで之を國有に移す方針が取られた。(同年十一月)

然し乍ら此の戰時共產主義なるものは實際に於て大破綻に會し、特に都市經濟と農村經濟との不調和により農民の大々的反抗に會して、終に之を支持し繼續すべき望なきに至りたることは周知の事實である。そしてレーニンの新經濟政策の行はるゝに至り、一九二一年より一九二四年に至る迄の間に一期を畫したる所謂國家資本主義時代を迎ふるに至つた。此の時代は勿論全然自由主義經濟に歸つたわけではないが、併し外國貿易が國家獨占である以外は國內商業の自由が認められ、經營上には收支の引合ふべき營利的打算が原則として承認せられ、十人以上二十人以下の勞働者を使用する小工業の私營が許され、公的性質を帯びたトラストに依る産業の統制が行はれ、貨幣制度が復歸せしめられ、國家資本主義といふ名の下に一種の統制經濟體系を造り上げんとする努力が爲されたのである。そして勞働保護の方面に在つては、勞働保險は都市

労働者に對して復活せられ、労働組合は認められて國家利益に背馳せざる限り労働者の利益を代表するものとせられ、調停制度も設けられ、賃銀に關しては再び又労働効果と賃銀との關係が認められることとなり、出來高拂制すら用ひるを得ることになつた。要するに新經濟政策は私的企業を相當廣き限度に於て復活することゝすると共に、労働保護の施設を爲すの必要に迫られた次第である。

然るに一九二四年に於けるレーニンの死以後は、ZINOVIEVは再び又漸次改造せられ、スターリンの手に依つて共產主義化に力が注がれ、個人主義の排除が企てられるに至つたが、此度は曩の戰時共產主義時代に於けるが如く急進的ならず、頗る用心深く歩武を進めることになつた。そして例へば調停制度の如きも一九二八年八月二十九日の法律に依つて改正せられたが、今やそれは二個の對立せる社會階級の間の利害を調停するといふのではなく、二つの國家的機關の間に於ける意思の合致を計るといふ風に解釋せらるべきものとせられた。

然る間に一九二八年の秋季から彼の五ヶ年計畫は實施せらるゝに至り、茲に

スターリンの
政策の
轉換時代

ソヴェイエト露西亞は所謂統制經濟時代を迎へることになつたのだが、スターリンの共同經濟化政策と中央集權主義に對しては、やはり農村は都市ほど容易に之に適合せんと欲せず、毎々強制せられて厭々乍ら之に隨従するといふ風で、一九三一年にはスターリンは其の方針の緩和を餘義なくせられ、所謂新經濟政策 (Neonep) の時代を見ることになつた。併し其の實狀は一進一退であつて、今日に至るもまだ中々に終局的安定を見るに至らない有様である。そして労働者に對する保護的施設の必要は依然として痛感せられ、其他一般に無産者の狀況は資本主義國に於けるよりもより以上に社會政策的保護を必要とする實狀にあること世に明かなる所であつて、共產主義の試鍊が何程も社會問題の解決に貢獻し得なかつたことを、白日の下に實證して居る次第である。

第十六章 統制經濟觀と社會政策

の經濟
新氣運

露西亞に於ける共產主義の試みはたとへ失敗に歸したとはいへ、次で行はれた新經濟政策による國家資本主義の時代の出現といひ、又其後に於ける共同經濟の強化といひ、すべて其等は世界大戰を一期として、廣く世界に頭を擡げ來つた經濟に關する新思想と之に基く社會經濟改革の氣運と相呼應するものであつて、從來の自由主義的放任經濟に對して、社會的に統制の行はれる新經濟状態を實現せしめんとする希望は、實に世界一般的な時代の要求を反映するものであつた。

社會的若くは國家的に統制の行はるべき新經濟への希望といふのは、其の主要點に就いて之を窺つて見るならば、大體次の如きものである。即ちそれは共產主義ならざる然かも從來の資本主義とは異なる、謂はゞ其の中間に位すべき新經濟體系を考へるものであつて、所謂統制經濟とか計畫經濟とか名けられるものは、大體此の考へに立脚するものである。

念の經濟
基礎統制

其の考へによれば、來るべき經濟も亦私經濟を基礎とするものではあるが、然しそれは決して從來の如く無制限なる自由經濟ではない。各私經濟を貫通して社會的公共意思が流れて居なければならぬのであつて、斯様な公共意思は從來に於ても經濟活動以外の健實なる人生活動に關しては既に存在し、之を支配して居る。そして又現今公共的任務に關して之を見るが如き道德性と責任觀とが、之を貫流しなければならぬ。

それは計畫の立つた秩序であり、認識の十分なる組織と、科學的徹底と、結成的な責任觀とに適したものでなければならぬ。そして此の組織的な力と法制との下に於ては、從來の無秩序なる總べてが總べてに對する軋轢の下に於て生み出さるゝものに比して、數倍多くのものが産出せらるべきであり、新組織の下に於ては有害なる鬭争なく、愚劣なる機關による投機が行はれることもなく、重要なものと必要なるものとの精力が注集せられることになり、下層から喧嘩ばかり仕掛けることの代りに、協同的な働が提供せられることにならなくてはならぬ。

又新經濟に在つては、あらゆる人的努力に依つて二重の目的が遂行せらるべきである。即ち一つには宗教とか藝術とか思索とかいふやうな精神的な要素から眞實な個人自由が到達せられ、文明と經濟と交通との如き智的な構成的な要素は、私的な個々の勤勞から有機的な結束へと發展して行くべきである。斯様な重大な變革を成就する爲めには、創造的な思索と堅固な意思の力とを要することは言ふ迄もない。従つて其の事業は到底一國民と一時代とを以てしては克く其の目的を果し得るものでない。一政府の決意による施設のみを以て行はるべきではなく、それは實に一般的なる建設の計畫と努力との功を積むことに依つてのみ成就され得るものである。

現時の經濟のやうに個別的で無統制な生産と交易と消費とが爲されるに於ては、經濟活動は一見甚だ活潑に行はれるやうであつても、其間に非常な無駄と浪費の生ずるを避け難い。普通の商品は平均的に之を見て其の價値の三分二乃至四分の三は勞働に依つて生み出されるものであるが、今商品が無駄に生産されたり、不經濟的に消費されたりするに於ては、此等の勞働價値は總べて徒勞

に歸することになる。然るに經濟の發達は要するに勞働の效用性を十二分に發揮せしめることに依つて行はれ、之を人生に役立たしめることにならなくてはならぬのだから、斯かる勞働價値の無駄な費は經濟の發達を阻害し、人生の幸福を低減することになるのは言を俟たない所である。

斯かる無駄は現時の經濟に在つては、獨り商品の生産及び消費上に於てのみならず、資本の投下に於ても、通商交易上に於ても、其他諸多の方面に於て、常に之を見る所である。そして現時の經濟に伴ふ多くの無駄と濫費とを防ぐ道は、經濟活動に對する個別的自由を制限して、之を一社會内に於ける統一せる意思に依つて統制する經濟組織を立てることの外には存し得ない。生産事業にしても、從來はたゞ個々の企業個々の經營が眼中に置かれて其の個別體內に於ける統制しか行はれて居ないのだが、それでは社會全體としての統制が取れる筈はなく、個別的な事業を社會的に集合して觀察したものを社會經濟といふだけでは、其の社會經濟全體としての自然的な統制が取れて來る見込はない。却つて分散と矛盾と濫費と不經濟とが生じるのは當然である。

然るに現時の進歩せる經濟に在つては、已に事業は段々統一せられんとする傾向がある。従つて勞働に就いて見ても、個別的な分業組織以外に社會的に之を見て集團的分業が行はれる風が表はれて來た。此の實狀は、應て進んで社會的の統一と分業組織とを造り出す勢の先驅を爲すものと見ざるを得ないのである。

經濟的社會的組織

大體右の如き見地から統制經濟を主張する人々は、現時の經濟の改造を希望するのだが、全經濟を全社會的に統制することの爲めには、共同組織を必要とすること勿論であつて、其の共同組織化の爲めには、現今既に存在する所の職業組合や産業組合の如きを利用することが可能で又得策だと考へられて居る。但し此種の組合に對しては從來のやうに之を其の自由活動に委かして置くことは出來なくなり、之を國家の手に依つて統轄することが必要となつて來る。何れにしても全社會經濟に涉つての統制を行ふ爲めには、國家は全社會意思の實行者として其の統制の任に當るべきは當然であつて、國家の任務は從來及び現時の實狀に比較して非常に複雑となり、又重要となつて來る。然るに國家

國家的統制と中間機關

が其の統制を行ふに就いては、直ちに各個の經濟體を客體として之を統制することは到底出來難いことで、又實效の舉がり難いことであるから、先づ何等か各個經濟を或範圍内に於て結合統一する所の組織があつて、之を通じて國家の統制は行はれるのでなくてはならぬ。其の中間統轄の集會的組織體として職業的若くは産業的組合は有用な働を爲すべきである。即ち例へばトラスト・カルテルの如きは、職業上の結合體として統制上に用ひらるべきであるが、それは固より從來のやうに只管に營利の目的を追ふものとしてではなく、公共的統制の爲めの機關として働くべきである。又勞働組合の如きも、職業的な結合體として勞働に對する國家的統制の行はるべき中間機關たる働を爲すに適するものである。

職業的團體の任務

職業上に於ける團體は、其の實際の任務としては、例へば商品の販賣及び其の輸出を行ひ其の販路を擴張するが如き任務、商業の補助を得て原料及び補助原料を調達し場合に依つては之を輸入するが如き任務、又内地製品の不足する限りに於ては全製品をも輸入するの任務、商品の輸送保管等に要する場所を得又

代價授受の爲めの手段を講ずる任務、更には又技術的經驗、仕事場の建造若くは改良、不成績なる營業の停止、必要な場合には直營の模範工場の建設及び經營成績良好なる營業に對する金融等々の手段に依つて生産を向上發達せしめ、又其の生産費を輕減する任務を行ふべきものだと思へられて居る。

尙又其の任務中には仕事々々に關し若くは地域々々に關して労働分業を科學的に研究して實行すること、規格を統一し、模型を設定することなども考へられ、更には給料生活者及び労働者の組合との折衝の任に當ること、政府及び立法府に對して職業利益を代表することなども、其の任務中に數へられる次第である。

此等の外、統制に關する中間機關としては、舊式なギルドに類似する性質を有する同業組合などの如きものも、取つて用ゆべきものとせられるのであつて、すべて此等の團體は有機的なる組織體として生きたる單一體として造り上げられ、統一的なる認識と判斷と力と意思とを備へたものであり、團體としてのイニシアチブを有し、自治的に管理されたるものであるのを例とし、又可とすとせ

られる。

次に産業上の結合團體は、職業上の結合團體に比して其の任務は簡單であり得る。然し其の任務は一地方に及び、其の内部に在る諸種の職業團體に對して統制を行ふことが出來、其の任務の實體は、主として衡平をはかり、仲繼を爲すことに存すとせられる。就中重要なりと思はれる任務を數へて見るならば、商品に對する需要を測定し、商品の品質、型、價格、引渡時期、代金支拂方法を定め、又労働の仲介を爲す等のことである。特に需要の測定に關しては、現今ではたゞ企業者各自が僅かに之を推察するに過ぎない有様である爲めに、常に需要と供給との不適合を來し、無駄の運送や貯藏を必要とし、其の爲めの設備も無用に大袈裟なものとならざるを得ない。然るに若し此の需要に就いて一般的に正確な測定が出來ることになつたならば、之に依つてどの位經濟界の統制が取れることになるか、測り知るべからざるものがある。

總べて此等の職業的並びに産業的結合は、大工業に於ては勿論のこと、更に大商業、手工業、美術工業、農業の或方面等をも包括し得るものである。但し小商業

や、土地に關する營業や、旅館料理屋業、地方的な交通運輸業の如きものは、叙上の職業的若くは産業的團體を通じて國家的に統制するよりも、地方自治體の手に依つて之を統制することを可とするであらう。即ち此等は國家的な共通經濟の爲めに行はれるといふよりも寧ろ地方的な利便の爲めに存するものであつて、此等に對しては地方自治體が監督權を握り其の統制を圖ることが、より能く目的に叶ふものである。そして都會地の住宅地、住宅、或種の交通機關、水道、瓦斯、電氣等に就いては、現今既に市有及び市營主義が認められて居るが、統制經濟内に於ては更に其の公共性が高度化されねばならぬ。商品の小賣配給に關しても公共的施設の必要なること勿論である。

然るに茲に注意しなければならぬことは、新經濟組織に於ては國家的統制が行はれるけれども、併しそれは決して一般的な國營主義を立てるものでないといふことである。寧ろ却つて國營主義の能率低きを思ふものであつて、前にも述べたやうに、統制經濟は私經濟を基礎として成立するものである。従つて此の新經濟に於ては、個人能力の自由なる發展を期するものであつて、個人の

非國營主義

イニシアチブを尊重し、特に發明其他あらゆる精神的活動を自由にして其の十二分なる能力の發揮を可能ならしめんと欲する。たゞ忘るべからざることには、新經濟に在つては經濟は決して最早個々人の私事ではなく、それは全社會的なる公共的任務の遂行に外ならざることである。

要するに新しき經濟時代に在つては、貴族的富豪の支配や資本專制が亡びて、眞に國民的な經濟が成立しなくてはならない。一方にはドニ底的な貧乏と、他方には無制限な贅態と安逸とが存し、事業はたゞ利得の一念に依つて導かれ、社會は上下の二階級に分裂して中部階級の慘めな没落が進行するといふやうであつては、ほんとの健全な社會經濟が成立し得やう筈はない。負擔は公平に分配されねばならぬ。事業は倫理化されねばならぬ。然かも其の改革は國家的專制を以てする共產主義の道に依つて行はるべきではなく、各個人は其の個性と責任とを保持し乍ら各個の事を行ふと共に、公共の務めを爲し、兩者が自らに一致するやうな新しい組織と活動とが實現することにならなければならぬといふのが、統制主義的な新經濟時代を期待する人々の考ふる所である。(W.P.T.)

改革の要旨

ther Rathenau, — Die neue Wirtschaft, Berlin 1918 參照)

前に一言したやうに、斯かる統制經濟的な見地は世界大戰後諸國の間に其の頭角を表はして來たのであるが、然かしよく之を實地に行ふに至つたものは殆んどないのであつて、たゞ僅かにソヴェエト露西亞が共產主義から退却して一九二一年に新經濟政策(Зем)を行ふに至つた時代は、或る意味に於て統制經濟を行ふに至つた時代と見て差支なく、其後五ヶ年計畫が行はれるやうになつてからは、色彩は幾らが變つて來たけれども、然かしやはり一種の統制經濟時代を繼續して居るもので、共產主義とは謂ふに足らず、さればとて普通の資本主義とは大いに異り、國家意思による全社會的統制の行はれる計畫經濟が實現して居るものに相違ないのである。仍て少しくЗем時代に於けるソヴェエト經濟の立前を檢討して、共產主義思想に依つて導かれたる統制經濟の立前は社會經濟一般の公共化を策するものであるが故に、社會政策的な見地に於て經濟なるものが考へられ、社會的に規律し整頓せんと企てられる其の考への方向や其の努力の目標と、此の種の統制經濟の往き方との間には、一脈靈犀相通するものあるこ

統制經濟の實例として露西亞の經濟

過渡的經濟體系

と、最も注意を要する所以を示すであらう。

ソヴェエト露西亞に於ては國家資本主義への實踐と共に、共產主義的な一般的私經濟否認から私經濟活動の承認への轉換が行はれたること、既述の通りであるが、然し其の私經濟的活動は資本主義的自由經濟に於けるが如き自由なものではなくて、其の承認は國家的な制限の下に於てのみ行はれるものなることを見通してはならない。そして其の國家的制限は、單純な規範的なものとして整理的なものに止まらないうで、積極的な行政的な干渉や關與を伴ふものであることも注意を要する。即ち國家は之に依つて經濟の公共化と國家化とを實現せんとするものであつて、ソヴェエト露西亞に在りては、新經濟政策による國家資本主義の樹立により、共產主義からは一步退いたが資本主義からは一步進んだ状態に立ち、過度的な中間經濟體系を造り上げんと企てたものである。仍て茲には國家的統制經濟なるものと、一方には普通に謂ふ社會主義若くは共產主義なるものとの相違を考へ、他方には資本主義との相違を考へて見なければならぬが、之を考ふるに當つては、先づ生産と需要との適合が如何にして計られるかと

いふ經濟實狀の根本事情について検討して見ることが便宜である。

國家的統制經濟も社會主義も共に自由主義經濟を改造して、自由組織に伴ふ經濟界の磨擦を輕減すること、不勞所得を排除すること、に依つて、社會經濟全體の生産力の増進を計らんとすることは同一様であるが、たゞ兩者は價格構成に就いて頗る其の企圖を異にするものである。即ち社會主義に在つては勞働價值説が妥當するに反して、國家的統制經濟に在つては自由市場に於ける需給の適合と貨幣計算に依る價格現象が持續せられるものと考へられて居る。従つて共產主義的社會主義に在つては、生産と需要との適合はたゞ經濟計畫に依つてのみ行はれるのに、國家的統制經濟に於ては計畫と市場の機能との二者に依つて行はるべきものとされるのである。

社會主義に在つては、たゞ勤勞所得のみが存在し、勤勞所得に依つて品物に對する需要は限定され、生産と需要との適合を計る爲めには、中央指導機關が豫め統計材料に依つて十分能く需要を測定して、生産をして都合よく之に適合せしむる道を講じるのである。従つて兩者の不適合といふことは表はるべき筋の

ものにあらずとせられる。そして生産物の價格は、其の生産の爲めに社會的に必要とせられる所の平均的勞働量に依つて計られると同時に、各人の勞働力は社會的平均に對してそれが附與貢獻する所に應じて報酬せられる。従つて全社會的に見たる勞働效果の總量は常に各人の需要の總量と對立し、兩者は經濟計畫上に於て完全に一致すべく計畫されるのである。

國家的統制經濟に於ても亦國家は生産手段と生産と配給とに對して統制を加へ之を指導するものではあるが、所謂市場の働と貨幣と價格計算とを保存するものであつて、自由なる所得構成からして、やはり完全に束縛を被らない所の需要構成が表はれる。そして需要は市場に表現して其の満足を見出さんと欲し、生産は又市場に對して行はれる。兩者の適合を計る所ものは實に價格そのものである。されば需要は豫め測定さるゝことなく、其の満足と不満足とを結果するものは市場の狀況如何といふことこれである。

茲に於てか國家的統制經濟が共產主義的な社會主義に對して有する長所は、市場と稱せらるゝものゝ機能に依つて需要と供給との適合を自動的に招來す

ることには在る。貨幣が使用されることに依つて、それは、共產主義が企てる所の貨幣の廢止により、労働時間の抽象的な價值單位を以て價格測定を爲さんとする不便と不確實と困難とを排除して、之を補充することが出来るといふ點に在る。そして他方に於ては、國家的統制經濟は生産力の増加と正當なる分配の實現特に不勞所得の排除といふことに依つて、資本主義に對して優越を占めんとするものである。

此種の國家的統制經濟は實に之を生産的計畫經濟と呼ぶことが出来るのであつて、ソヴェエト露西亞に於ても之²⁰以來之に似たものが實行されるやうになつたことは、戦時共產主義の必要充足經濟から生産計畫經濟に移り、殊に五年計畫の實施以後は益々其の色彩を明かにしたものと見ることが出来る。惟ふにソヴェエト戦時共產主義は、分配方面を根據とし之れより出發せるものであつて、それは貨幣所得たると労働所得たるとを問はず自由なる消費機構の基礎となるべき一切の所得を否認したのである。中央指導權は權力を以て各個人への分與割合を定めると共に社會的需要に適應して生産を決定せんとした。

生産計畫
經濟生産と消
費との適
合

即ち需要のみが原因となるのであつて、需要が生産の結果に依頼して決定されるといふことは、認められなかつたのである。

然るに統制經濟は之に反して自由なる所得構成を認め、従つて其の所得に依頼して定まる所の各個人の需要構成を認めるのである。即ち消費と生産との間に存する相互的な因果關係が承認せられ、従つて生産と之に追從する消費時間との間の因果關係も承認せられるのである。生産と消費とは市場とそしてその價格現象とに對して働を及ぼすのであつて、價格は又其の平均作用を行ふものである。そして市場に表はれて其の働を爲すべき購買力に對する認定は貨幣經濟が之を可能ならしめるのである。そして又生産と消費との平均關係若くは平衡作用を認識せしむる所の經濟的測定は、共產主義に在つては統計的計算として僅かに不完全な任務を果すに過ぎないが、統制經濟に在つては貨幣計算として平衡關係に對する洞察の前提となり得る。財貨生産の計畫的なる指導は、先づ第一に生産手段と労働力との使用上に於ける合理的構成を必要とするから、それは價格即ち貨幣計算を不可避的のものたらしめる次第である。

貨幣計算の齎らす此の利便は、統制經濟が自由主義的な市場經濟と共同に、共產主義的社會主義に對して保有する所であつて、それは同時に又自由なる所得構成と需要構成との中に其の基礎を置く所の經濟活動に對する刺戟を保存するものである。要するに統制經濟に在つては、經濟は國家の手に依つて集中的に統御せられるのであるから、其點に於ては、程度の差こそあれ共產主義其他總べての集權的な社會主義と共に、自由なる資本主義に對して長所を有する次第で、生産を需要に適合せしめ、生産過程それ自身を完全に構成し又生産効果を高めることを可能ならしめるものと考へられる。そして此の事は唯單に經濟上の衡平を保たしめるといふだけでなくて、生産的計畫經濟としての眞意義を成さしめる所以である。

資本主義に在つては、生産は不可知的な市場なるものに對して行はれ、財貨の供給者は、其の業務方面に於ける全需要の大いさを知ること出来なければ、又分散されたる全生産の中のどの部分が果して彼に割當てられるのかを豫め判断することも出来ない。誰か他の生産者が既に需要者を満足せしめて、己れは

資本主義
長に對する

其の市場關係から遁れ去らねばならぬのではなからうかといふことも、豫め判断し得ない。此の不確實と豫見の不可能といふことは、唯だ投機的考察に依つてのみ不完全ながら之を克服し得るに過ぎないのであつて、それは實に不生産的な費用を原因することになる。此の缺點をば、計畫經濟は其の集權的な統制に依つて、或程度まで回避せんとするものである。

以上之を要するに、所謂統制經濟は共產主義の如く單一的なる社會經濟組織を造り上げんとするものではないが、然し又同時に資本主義の如く自由なる私的經濟活動を許すものでもなく、私的組織と私的活動とを基礎とする經濟をば、國家權力の統制下に置き、一種の中間的な或意味に於ては過渡的な經濟體系を造り出さんとするものである。斯かる經濟の下に在つては、社會政策は其の考への根本に於ては能く一般傾向と一致し、共に經濟なるものを國家的に整へて、國家一般の社會的共同生活の意義と經濟の目的及び任務とを合致せしめんとすることに於て、社會政策は國家的統制見地に立脚するものたるを失はない。見方に依つては、社會政策的な要求が益々重視せられ其の勢が進められるに連

社會政策
の根本
的一致

れて、自由主義經濟は變化せざるを得ず、漸次に統制經濟的傾向に向つて進み行くものと謂ふことも出来るのである。

けれども注意せなければならぬことは、統制經濟が實現して、其の統制の實績が益々揚がり、社會經濟が一般的に整頓されて國家生活上の要求と漸次に合致して来るやうになれば、從來自由主義制の下に於て認められたる諸多の社會的弊害は追々に除去せられ消滅に歸することにならざるを得ざる筈のものであるから、従つて自由主義經濟の下に於て必要とせられたる諸社會政策的施設は追々に其の必要を失ひ、從來の社會政策の範圍が縮小せられると共に、社會政策なるものゝ一般的内容も多少づつ變化することになるを免れ難いといふこと之れである。完全なる共產主義の下に於ては、今日の意味に於ける社會政策は全然其の必要を失ひ、若し社會政策が認められることになれば、それは現在の意味のものとは全く内容の異つたものになつてもうべき筈のものであるが、統制經濟の下に於ては、社會政策が全然其の必要を失ふことは無く、又其の内容も全然今日と異なるものとはならない筈である。即ち自由主義經濟體系と共に

産主義經濟體系とは全く其の立場を異にし、相反觀し、辯證法的に互に「反」アンチテシスたる地位に立つものであるから、自由主義經濟體系の地盤の上に認められる社會政策が、共產主義の地盤の上に成立し得べき筈はないのだが、統制經濟は自由主義經濟に對してそんな反觀的な地位に立つものではなく、寧ろ自由主義を地盤として之れに國家的單一經濟主義を加味して統制を行はんとする中間的な若くは折衷的なものであるから、社會政策は依然として其の存立の地盤を失ふことにはならない。唯然し乍ら國家的統制が完了するに連れて、自由主義の下に認められたる其の必要の範圍の縮小さるゝことは、之を奈何ともし難きものである。そしてその事は社會政策に取つては何も悲むべきことではなく、其の必要の減ずるは即ち其の目的が達せられ其の任務が果されるに由る次第であるから、社會政策としてはそれをこそ望む所といはなければならぬ。即ち之れ病癒へて治療と服藥の必要なきに至るものである。

新運動

第十七章 フアツシズムと社會政策

世界大戦當時より露西亞を中心とし歐洲諸國間に擡頭したる共產主義運動と併行して、然かも其の反對勢力として大いなる進展を遂げたものは、新國家主義運動であつて、一方に伊太利のファツシヨ運動として、他方に獨逸のナチス運動として、二つの支流を造り乍ら、其の根本に於ては一の共通なる流れとして世界歴史上に一異彩を放つに至つたものである。

此の新たなる傾向は四つの運動の合流と見ることが出来る。其一は十九世紀より二十世紀に互りて支配的な勢力を形造つて居た所のデモクラシーに對するオウトクラシーの復讐的な反抗運動であり、其二はボルシェヴィズムの脅威に對する地主及び企業者資本主階級の抗爭であり、其三は資本階級と無産階級との挾撃の下に漸次に其の社會的地位を危くせられ經濟的運命を狭められる中産階級の自己保存運動であり、其四は民族的結成と之に伴ふ猶太人排斥運動である。つまり此等の諸運動が新たなる國家主義傾向の指導の下に合して

其の合成

獨伊の國情

大いなる潮流となつた次第である。そして其の國家主義傾向はデモクラシーの發現形態たる議會政治に對する失望と不満と相反映して、議會政治を以て衆愚政治なりと考へ、獨裁制を以て却つて最良者の政治なりとする信念と併行せんとしたのである。

そして此の新たなる運動が伊太利と獨逸とに於て主として勢力を得、遂に政治の改造を行ひ、經濟生活の上にも著しき變更を加ふる迄に立至つたのは、獨伊兩國の國情の類似といふことが、其の條件を爲すを見通し難い。

試みに其の類似點をいへば、兩國共に曾ては神聖羅馬帝國の柱石を以て任じ、其の血脈を承繼すべきものは自國及び自國民の外に無いと信じて居る點、次には共に奈翁治下の時代に大いなる屈辱を被り、之に反抗して曾て十九世紀の初に當つても國家主義運動の勃興を見たること、次には國家主義運動の先達として一はビスマルクを他はカッセルを戴き、其の指導の下に國民精神を振興され國家主義の實地的洗禮を受けたること、次には世界大戦に依り伊太利は其の當然に獲べきものと信じたる所のものを與へられず、大いなる犠牲を拂つて其の

結果は英佛などの爲めに火中の栗を拾つてやつたに過ぎなかつたといふ感じを禁じ得ず、之が爲めに大いなる國民的憤慨を惹起し、獨逸は又大戰の結果足腰立たぬ迄に打のめされ、此儘に經過すれば國民的衰微と國家的半滅亡状態に陥る外なく、何と慰めても慰め切れぬ悲憤の涙を濺がざるを得なかつたこと、次に兩國共にボルシェヴィイズムの脅威を受け、若し國家主義又は民族主義運動が起らないならば、恐らくはボルシェヴィイズムの治下に包括せられる外はないといふほどの状態に迄押詰められたことなどである。此等の共通原因の働いて居る所へ以て来て、時代相としてはボルシェヴィイズム的な思想に反流する新しいローマンチックな思想の流が力を得て、然かも其の流は伊獨兩國國民性に合致する所あり、兩國に於て有力に育ち得る素地を見出し得たことも、見遁し難い所である。要するに斯くの如くにして、種々の原因と條件とは遂に兩國に於てフアッシュヨとナチスの運動の成就を結果せざるを得ざるに立至らしめたのである。

仍て少しく伊太利に於けるフアッシュヨ運動に就いて概括的な觀察を試みた

フアッシュ
イズムの世
界觀

非唯物史
觀

いのであるが、先づフアッシュイズムの世界觀から始めることにする。

フアッシュイズムはマルキシズムの所謂唯物史觀に對比する意味に於て之を云へば、唯心的史觀に立つものと見ることが出来るであらう。そしてそれは個人主義を基礎とする社會組織を喜ばず、之を排除せんとするもので、個人主義的な資本主義制にも反對であり、又個人主義的な社會主義にも反對である。特にそれが社會主義を以て個人主義に立脚せるものと爲し之を排撃することに努むる點は、元來フアッシュヨ運動がサンデカリズム流の洗禮を受けて社會主義的な色彩を以て始められたこと、對比して見れば、頗る興味のあることであらねばならぬ。然しともかく其れは出來上つた思想の傾向としては、唯物史觀に大反對であつて、之を以て全然誤謬なりとは考へて居ないけれども、畢竟一面的な史觀に過ぎずと見、從つてそれに依つて全面的に歴史を解釋することの不都合なるを指摘し、必ずや之を補充して完全な歴史觀を造り上げなければならぬと見て居る。即ちフアッシュイズムの見る所を以てすれば、人間生存の物質的な條件は人生に於ける重要な要素には相違なく、從つて之を輕視することは元より誤

りだけれども、之を以て人生の根本條件と見るべきものでは決してない。物的條件にはそれ相應な人生に於ける地位を得しむることが肝要で、之を過重視すべからず又之を輕視すべからず、人間生存條件としての其の地位に適當して之を尊重すべきものだと思ふのである。

次にファッシズムの見地の特色は、それが極めて綜合的で直覺的な點に存する。即ちその見る所を以てすれば、社會は之を造る各個人の利害による結合體ではなく、社會構成要素としての各個人が精神的に結合されたるもので、社會は其の意味に於ける精神的統一體である。そして此の統一體たる社會は、決して近代文明のあらゆる成果を否定するものではなく、悉く之を受け入れて之を陶冶し、統一し、合成するものであると見る。然かもファッシズムは社會を統一的全體と見乍らも、之を構成する各個人の法律上の地位の平等を否定せず、又其の經濟生活の自由をも否認しないのであつて、其點に關しては個人主義の見地が之を保持する所を認容し、之と統合的な社會的團體主義との調和を計らんとするものである。換言すれば、個人の法律上の獨立平等と經濟上の自由とを基礎

綜合的
直覺的
傾向

文化的
綜合的
完成

農民精神
の特色
の維持

としての國家主義的な社會的團體主義を建立せんとするものであるとも謂ひ得るし、或は又逆に國家主義的團體主義の下に於ける個人の自由と平等とを其の範圍内に於て承認し、團體主義の見地と矛盾せずと相容るゝ限度内に於て個人の自由と平等とを認むるものだとも謂ひ得る。

然しとにかくファッシズムは新たな國家主義的な見地に立つて社會の誤らざる又完全な構成を爲し遂げんと欲するものであるから、社會としては文化的綜合の完成を期し、同時に人間の精神的完成を成就せんと希望するものである。そして人間の精神的なる完成の爲めには、信仰心を昌にし犠牲心を喚び起して、宗教的な道徳的完成を圖ることが肝要だと見て居る。

斯くしてファッシズムは古き文明と新しき文明とを融合せしめ、古き精神と新しき精神との融和を計り、希臘羅馬精神と現代精神との和合を實現せんとするものであるから、それは一面に於て保守的な所もあるが、同時に又進歩的でもある。決して保守と復古との一點張ではない。だが古くて良いものは飽迄之を保持しなければならぬといふ點に力を注いで居ることは、見通してはならぬ

い所であつて、特に伊太利のファッショ運動としては、之を伊太利農民の自覺を基礎とする新運動であるとも見ることが出来る位である。然らば伊太利農民の思想上の特質はといふに、實直であり、勤勉であり、儉約であるといふこと、規律と権力に對して常に十分なる尊敬心を有するといふこと、極めて敬虔であり宗教的意義に於ても道德的意義に於ても然か謂ひ得ること、であると考えられて居る。然かも伊太利農民の間には家族制度的な精神が多分に宿つて居ると見られる所から、ファッショは此の尊ぶべき精神が動もすれば現代の思想と實生活との傾向から崩壊せんとするのを憂ひ、其の維持と涵養とに對して十分なる努力を拂はんとするものである。そして又伊太利農民の間に於ては、男女の性格が明確に分離して居るが、之も亦現代生活の傾向からいへば段々に接近して同一様ならんとする恐があるから、注意して舊態を保持せなければならぬと考へて居る。次に又伊太利の農業は其の業態的構成からいへば、協同組合に依つて結合されたる小自作農と、其の権利が慣習上確定されて居る所の歩合小作農と、團體契約に依つて小作料の一定されて居る所の自由小作農とから成

立つて居て、彼等の間には所有權の觀念が強烈で、元來反資本主義的な特色を有し、總じてフチブルジョア的であるが、此の特色も亦特色として重視されるべきものだと見て居る。

此等農民精神と農業の特性とは、古き傳來を有する良き精神よき特色として之を維持すべきのみならず、此の農民精神は廣く之を全國民の間に普及せしむべきものだと信じ、農民精神が極めて直覺的で、既往數世紀間の合理主義的な分析傾向と對蹠する點を重視し、之を基調として一般的に伊太利精神は造り上げられなければならぬと考へ、今後の文明は根本的に農民文明たらしむべしとすら主張するのである。尤も伊太利のファッショは斯く農民精神と農業の特質とを尊重し乍らも、都市の存在を以て呪ふべきものとは見て居ない。寧ろ反對に都市の存在も亦必要なものだと考へるのであるが、たゞ現今、月に年に其の弊害の甚しきを致しつゝある點、例へば都市が國民生活を獨占する傾向あること、都市經濟が動もすれば寄生蟲となり農民の利益を吸収することに傾く、嫌あること、人口の都市集中を來し國民の大部分が都市住民となる風あること、農村と

農民精神
の全國的
普及

都市問題
の是正

都市とが段々に精神的にと文化的にと隔離する兆向あることなどは、極力之を矯めなければならぬと爲し、都市と農村との相互扶助の必要を説き、然かも農村を主位に置き都會を従位に置くこと中世時代の如くでなければならぬと主張するのである。

要するに斯くの如き根本精神に立脚して社會改造に向つて動き出し、終に或程度まで其の目的を達したのが伊太利のファシズムであるが、其の運動の國家主義的な特色に就いては、更に今少しく詳かに之を検討して、此種の運動が新國家主義運動と稱せられる理由を明かにする必要がある。

ファシズムは國家主義運動であると共に又一種の民族運動であつて、其の意味に於ける基礎概念としては「イタリアニタ」"Italianita"の信念を見通し難い。之は國家的單一性の概念であると同時に、伊太利といふ祖國に對する信念であり、伊太利人は伊太利を造り此所に纏つた一つの共同生活を營むもので、其の伊太利は獨立にして犯すべからず、自由にして尊嚴なるものである。伊太利は飽迄伊太利で伊太利人の伊太利である。然かもそれは共同團體としては最高の

イタリ
ニタの信
念

ものであつて、個人の集合體以上のもので、過去に根生え將來に榮え行くもの、それは一の倫理的結合體で、出來上るべくして當然に出來上つたものだと見るのである。要するにイタリニタは倫理的、政治的、經濟的單一體なりと見る。

國家生活
の必然性

抑もファシズムの見地に從へば、人間は元來社會的集團生活を營むやうに生れた動物であつて、然かも人間の行動は神の掟に基く道德律の支配を受くるものである。そして分化したる人間集團即ち例へば民族國家の如きは自然的な發生物であつて、決して人爲的に便宜上設けられたものでない。されば國家といふものは、民族的團結(Nation)の歴史的並びに法律的實現に外ならないものであつて、伊太利の民族的團體は一の倫理的、政治的並びに經濟的單一體としてそれはファシズム國家に於て完全に實現するものと見る。此の意味の國家社會は一の有機體で、然かもその意義は決して比喩的な意義に終るものではないと考へるのである。

然らば國家の主權に就いては如何に解釋せられるかといふに、ファシズムは民主主義を排斥するものであるから、人民主權の觀念を否認し、國家自身が一

國家主權
の觀念

有機體として主權を具有すると見るのである。元來主權を人民の總意と見るのはデモクラシー的な見地であり、個人意思の總和が國家意思であるといふ風に考へ、社會の利益といふことも畢竟個人利益の合計に外ならないと解するマシエスター學派流の考へ方も、元之れ個人主義に立脚せるものであることは絮説を待たない。そして此の人民意思の總和といふ見地から多數政治の形態は要求せられ、議會政治も其間から生れて來、レヴェンダムや比例代表等の試みの如きは總べて此の見地を徹底せしめんとするものに過ぎない。然るに多數政治は何れの國に於ても現今その失敗の跡の掩ふべからざるものがあるが、其の失敗の原因は、人民に政治知識が缺けて居り其の訓練も不十分で、普通選舉の如きを行ふことは時機尙早なりしが爲めであるか、それとも多數政治と之を實行するが爲めの代議政治なるものとは、其の本質上に缺陷があり、元來代議士が多數選舉民の政治意思を代表するといふことが不可能事であることに、其の原因が存するか、此點が最も研究を要する點でなければならぬ。然るに之は明かに本質的な缺陷に基くものであつて、多數人は我利々々主義者に過ぎない

民主主義の非

點もあるが、國家の意思なるものと人民の總意と稱せられるものとは、本來別個のもので、兩者は常によく一致するものでない。そして國家の意思は常に高い道德的水準に在るべきものである。

若し民主主義者の考へるやうに、社會の總意なるものが個人意思の和に依つて成るものだとするならば、それは結局は力に依つて定まる外なく、肉體的の力か資本の力か集團的な多數といふ力か、ともかく力といふものゝ盲目的な決定に依る外はい。従つて茲に利害闘争に依る決定を促すことになり、個人的闘争と階級的闘争と政黨的闘争とが隨時隨所に行はれ、社會は宛然一の闘技場たり、社會生活は拳闘化してしまふ外はなくなる。けれどもそれは如何にも殺風景なことであつて、動物社會と多く選ぶ所はなくなつてしまふ。

主權は元來國家そのものに在るのであつて、それは法律的には獨立なるあらゆる法令の最高にして根源的なる源であり、政治的には國家目的は個人目的や階級目的に卓越し、國家の權力は所謂高權としての性質を有する。要するに國家は社會生活形態として最上最高のものなるが故に、社會生活に關する最高意

國權の根源

思の所持者であり、あらゆる權力の根源であり、法令を定むる獨立の力を有する次第である。而かも忘れてならないことは、國家は倫理的な結合體であるから、國家生活は常に道德律に依つて規定せられる。従つて國家の權威も亦本來道德に基礎を置き、道德律から抽出せられるものである。即ち道德上正なるもの善なるものは秩序を生み出し、秩序は規律として表はれ、規律は權力を伴ふ次第で、權力は畢竟正と善とに基き、その發現に外ならない。従つて權力を以て行はれる政治は善にして正なるを要し、邪惡不正なる政治はほんとの政治でない。政治を行ふといふことは正しきを行ふことで、政治家は正しきを行ふ人でなくてはならぬ。政治家に最も大切なものは道德的要素即ち其の徳性である。

尙又國家は手段的存在物にあらず、個人主義者の見るやうに個人生存の便宜上造られたものではなく、倫理的な獨立存在物であつて、人格的な獨立存在價值を有する。従つて專制政治は不可であり、極力排斥せらるべき筈のものである。國家を構成する各人と各團體との活力は十分に之を發揮せしむることを要し、個人生活と國家生活とが乖離すべき筈のものではない。但し個人の權利は國

國家の獨立性と集

國家の力と各人の地位と自由

家全體の利益の範圍内と限度内とに在るべきもので、所有權といひ所得權といひ勞働權といひ總べて皆然らざるはない。然るに國家は民族國家たることを以て最も合理的となし、それは單なる外形的な構成によらず、精神に充ち文化的なる任務を帯ぶるものたること既述の通りであるから、あらゆる事は國家の爲めに行はるべく、何事も國家外に於て行はるべきものでなく、特に何事と雖も國家に對抗して行はるべきものでなく、従つて國家は集權的なるを要する。彼の三權分立の思想の如きは排斥せらるべきもので、國家の權力は單一であり、各獨立なる部分に分つといふ意味に於ては不可分的である。此の國家觀念の下に於ては、國家的支配と之に對する服従の觀念は高揚せられるのが當然で、部分の全體に對する服従は、共同體に於ては絕對不可避の條件である。そして各個人や各階級の如きは、其の存在價值を全體としての國家生活に對する其の各々の重要性より判定すべきものであるから、其等の各々の存在價值は不平等ならざるを得ない。そして又各個人や各團體若くは各階級の自由と國家の權力とは、不可分的に一致すべきもので、國家權力を離れたる各個人若くは各種團體の獨

立的な存在と無制限な自由とは認められ得べきものでない。要するに國家は獨立なる一個體であつて、各個人や團體は其の組織分子たり其の構成要素たるに外ならずと見るのである。

斯くの如き國家見地からすれば、ファッシズムの社會經濟に對する見解も自ら或特色を備へたものであるべきことは、何人にも容易に想像され得る所である。少しく其の重要な諸點を叩いて見やう。先づ經濟一般を以て國家的社會生活の一表現と見、若くは其の一方面と見ることは當然であつて、社會經濟は個人々々の之を營む私經濟や各事業團體の如きが之を營む私的經營の合計されたるものと見ないで、やはり社會經濟といふ一つの纏つた生活體系と見ることは、國家有機體の見地から必ずさうでなくてはならぬ所である。従つて之を全體的に整へ全體としての向上發展を遂げしめて、國家生活全般の向上發展に貢獻せしめ、各個人の幸福も其間から流れ出づるものと爲さんと欲することも、絮説を待たない。

資本主義
資本主義

然らば斯かる全體的見地に就いて、なくては、經濟の具體的内容に就いては如

何であるかといふに、現今經濟上重要な意味を有する資本に關して見るに、ファッシズムは資本主義にあきたらない立場を取つて居るが、さればとて決して共產主義などのやうに私的資本を否認しない。ファッシズムの見る所を以てすれば、資本主義は餘りにも自由主義に徹底して、資本の完全なる所有自由と完全なる使用自由とを原則とする所から、自由競争が字義通りに行はれ、其の結果として多數者が少數者に依存することになつてしまつた。然るに社會主義や共產主義は、餘りにも又反對に走り過ぎ、資本の私有を全然否認したり、其の自由使用に對して之を禁止したりせんと欲し、其の結果は多數者が國家に依存することにならざるを得ざらしめる。そして實際的には兩者共に多數者を無產者化してしまひ、資本主義は不完全なプロレタリア國家及びプロレタリア經濟を實現し、共產主義は完全なプロレタリア國家及びプロレタリア經濟を實現せんとする。然るにプロレタリア國家及び經濟は畢竟奴隸的な國家及び經濟生活たるに外ならないから、ファッシズムは飽迄之に反對せざるを得ない立場を取るのである。然かも亦資本主義は利潤の追求に之れ急なるが爲めに、國家利益と

背馳し、國家利益を犠牲にする場合多く、生産は殆んど利潤の産出の爲めにのみ行はれ、消費利益を無視し、甚しく經濟の本義に反することになる。それに又農業は衰微に陥るを免れ難く、人口は都會に集中し、又全體としては人口減少を來し、道徳的墮落を招致する。

ファッシズムは斯くの如き大弊害を救ふことに専念し、種々の積極的見地を示して居るが、先づ財産に關しては所有制度の淨化を實現せんと欲する。即ち財産權は飽迄之を尊重すべきものと考へ、財産の獲得といふことは責任を取得することを意味し、從來此の責任觀念が萎痺したるが爲めに多くの弊害は生れて來たのだから、今後は大いに責任觀念を養ひ、財産に關しても、其の所有には必ず大いなる責任の伴ふことを高調し、財産に對しては人々は皆之を以て公有物を信託されたるものと考へる風にならなければいけないとして居る。この公有財産信託の觀念を以てすれば、財産の使用上に於ても恣意放縱を許さず、之を所有し使用することに依つて社會の總體的利益を害することを許さず、財産權は決して絶對無制限なものでなく、常に公共的利益と合致するやうに努め、私益

財産制の淨化

と公益との合致を計るべき責任の存するものとする根本觀念を確立しなければならぬと主張するのである。つまり財産の私有は之を認めるが、財産は常に一般的利益に合致するやうに之を使用すべき義務を伴ふものと見るのである。そしてファッシズムは最も力を公共福祉の維持増進といふことに注がんと欲する所から、財産を無條件的に自由に所有し又使用し、大企業を起して大いなる富を造り出すよりも、健全なる社會制度が樹立せられ、健實なる社會生活の行はれることを以て優れりとし、只管なる富の増殖と蓄積とよりも、調和を得たる富の分配といふことにより多く注意の向けられるべきことを考へて居るのである。

此の見地からファッシズムは大所有大事業主義よりも寧ろ小所有を尊重し、賃銀生活者を有せざる小經營に依て社會的經濟組織の出來上るのを以てより健全なりと見て居る。之れファッシズムが中産階級運動たり小ブルジョア主義だと稱せられる所以であつて、自作農と歩合小作人とを以て成れる小農民と小商人と小事業家と獨立職人とを社會的な重要分子と見、此の階級に在つては

中産主義
と中産階級
保護

家族制度と財産制度とが都合よく合體し、彼等は利潤を逐ふが爲めの生産者にあらずして、消費上の必要を充し人生を生きんが爲めに生産を行ひ經濟を營むものであり、其の精神は獨立的で自由を愛する人々であるから、此の人々の形造る階級は保護育成しなければならぬ所のものだと思つて居るのである。換言すれば、資本主義の下に於ける大産業方針と大企業主義との爲めに此の階級は没落に瀕して居る次第なれば、之に對して此の階級を防護してやらなければならぬと考へ、其の爲めに必要なる諸政策を行はんと欲するのである。同時に又新中等階級と呼ばれる人々の中、専門家階級と名づくべきもの即ち醫師、辯護士、學者、藝術家、技師等を保護すべしとして居る。

そして無産者階級に對しては、なるべく將來其の數を減少せしめる方針を取り、又其の階級に對しては十分之を保護して、彼等が段々に無産者たる境遇を脱して中産階級に上ぼり行き得るやうにしてやらなければならぬと主張し、又其の政策を實行せんとするのである。其の爲めには労働權を確立し、労働諸條件を改善し、労働の利害と産業の利害とを一致せしめ、労働者と雇主との關係に人

無産階級
保護協同的連
帯主義

情味を有たしむるやう兩者を社會的に結合せしめ、其の道義心を涵養し、又労働は社會奉仕なりとの觀念を養ひ、其他一般的に労働者の精神的向上と福利増進とを促すべき方策を實行すべきだとする。

此の目的の爲めには、産業に對しては國家的なる統制の行はれることを必要とし、其の統制は上からと下からと雙方から實績を擧げるやうにする爲めに、組合的な協同組織を造り上ぐるを可とし、一種の組合國家若くは共同經濟組織を實現せんとして居る。そしてあらゆる社會問題は、此の組合的共同組織の働きに依つて根本的に解決せなければならぬと考へ、すべて民主的なる黨派組織を撲滅し、全國的的全社會的觀念を以て貫き、階級闘争的な觀念を根絶して社會連帶觀念を確立し、依て以て社會的なる共同存在即ち相互依存と共同繁榮とを實現して、堅固にして慰樂なる社會生活を造り出すべしとする。そして其の爲めには、個人間に於ける相互的共同活動を必要とするのみならず、階級間に於ける共同活動を必要とするから、資本主階級と労働者階級とは飽迄和衷協同して共同利益を認識し、其の増進の爲めに働くべきものであり、頭と手との共同活動

も其の意味に於て必要とせられ、經營と技術とも亦同様に共同活動を爲すべきものと主張せられる。そして國家は全社會的利益の支持者として又其の指導者として働くべきもので、經濟の組合的共同組織と階級的連結とを實施し、國家の統制的なる指導権をかなめとする扇形な結成を造り上げんとする。

要するに斯くの如くにして共同組合國家(State corporation)を組立てんとするのであつて、國力の強大は經濟の充實に基すとの根本見地から、生産力の増加を計るべしと爲し、其の爲めにも階級闘争は之を排除せざるべからず、共同労働は必要缺ぐべからずと爲すのである。されば其の組織は、一種のサンデカリズム流のもので、固より社會主義的なる階級的なサンデカリズムではないが、國家的なサンデカリズムと云ふことが出来る。そして現今の激烈なる國際的競争場裡に立つては、國內に於ける個人間の競争はもはや經濟の根本原則たるに適せず、個人を組織して全國家的な經濟力たらしむることが、最も肝要なことだと考へられる。國家内の經濟を計畫づけ、國家が之を指導することは、其の意味からも必要であり、労働は須らく之を國軍的に組織化すべきものとせられる次第である。

労働憲章
の制定

ある。

茲に於てか彼の労働憲章(Carta del Lavoro)は制定せられたのであつて、其の中に含まれた重要な規定を抜萃すれば、左の如きものである。

全生産は國家的見地よりすれば一の單一體である。其の目的は單一で、各個生産の福利と國家權力の發達とを以て同一様に其の任務とする。(第二條)

雇傭者及び被傭者の重要性は生産全體の重要性の下位に立つ。(第四條)

生産の重要性は國家的重要性である。(第六條)

生産の全重要素の代表者としてコルポラチオン(corporation)は自己所屬團體の全權を有するあらゆる場合に於て労働關係の整規と生産の秩序とに關する規程(規定)を定めることが出来る。(第六條)

協同組織的國家は生産の領域に於ける私經濟的イニシアチヴをば國家の利益に關する有効な用具として尊重する。(第七條)

生産に關する國家の干渉は私的イニシアチヴの缺けたる場合、若くは不十分なる場合、若くは國家の政治的重要さの問題となる場合に於て行はれる。そ

して其の干渉は監督獎勵乃至は直接なる事務管理の形を取り得る。(第九條)
賃銀は普通の生活必要と生産の可能性と労働契約とに適應すべきものである。(第十三條)

生産恐慌及び貨幣的變動の結果として表はるゝものは生産の各要素に對して一様に分擔せしめられねばならぬ。(第十三條)

以上の諸規定について之を見れば其所に表はれる所のものは、經濟利益は國家生活に從屬的なること、國家と經濟との關係は私有財産制や私的イニシアチブの維持などよりも經濟組織に取つて重要であることを以て根本概念と爲すことがわかるであらう。之れ國家主義の國家主義たる所以であらねばならぬ。そしてフアッシュイズムに於ける社會政策が如何なる方針の下に行はれるかも、叙上の見解に從つて之を見ることに依つて理解し得られる所であり、自由主義を原則とする諸國よりも、それが更に立つたものであり、國家主義的團體主義を促進し完成することに役立つべきものとして行はれることは、最も明瞭に之を窺知し得る次第である。試みに労働契約に就いて見るに、労働に對しては

根本見地

労働の保障

團體契約

縦の統制と(サンデーカーに依る)横の統制と(コルボラチオンに依る)が同時に行はれるやうにし、然かも其の労働統制の源は集合的労働契約を行ふといふこと、労働裁判の行はれるといふこと、に在りとせなければならぬ。即ち勞資關係は集合的團體契約に依つて先づ合理的に之を整へ、其間に爭議の發生する餘地なからしむるに努むると同時に、若し不幸にして爭議の生ずる場合には、先づ適當團體をして和解を行はしめ、それでも治まらなければ國家が裁判に依つて之を治定してしむるのである。従て罷業も閉出も之を法的に禁止するのである。

罷業が禁止されては労働者の権利が尊重されないやうに見えるが、労働の保障に關しては労働憲章が十分物を言ふ次第で、團體的集合契約に重きを置くのもそれが爲めである。集合契約は其の條件として文書に依ること、登録されること、有効期間が限定されることを要するが、其の代り一旦正式に締結されるれば、之を締結したる當事者たる組合以外に對しても、之に依つて代表されたる職業部類に屬するものに對しては適用されるのであつて、やゝ公法的な效力を有し、所謂産業協約(Industrial agreement)たる性質を有する。そして團體契約の内

労働裁判

容には、労働報酬の額、報酬の仕方、労働時間、見習期間、家庭労働、休憩時間、夜業、週休日、有給祭日、解雇手當、死亡手當、軍役又はファッシヨ徵集、疾病金庫、其他爭議の解決方法等が含まれる。そして謂ふ迄もなく、其の團體契約の實行に對しては之を監督する機關が設置されるのである。次に労働裁判は罷業の禁止と結び付き、それは共にファッシズムの經濟と國家との關係に就いての根本見地に基くものである。換言すれば、ファッシズム的國家觀念に發源する次第で、國家の優越性と其の統治力に關する信念は、之を以て個人に君臨すると共に産業若しくは職業團體にも君臨するものと爲すが故に、個人の間若しくは團體の間に於て之を治定し能はざる所のものに對しては、國家が之を治定する力を有し、國家は裁判を以て之を治平するのである。従つて之は根本的に階級闘争の觀念を排斥すること既述の通りであつて、罷業若しくは階級闘争の權利は自由主義に依つて確立せられるけれども、國家主義に據つて立つファッシズムは之を否認し、階級闘争に代ふるに國家裁判を以てせんとする。そして國家の裁判は飽迄正義に依つて行はれるもので、労働關係は正義に依らない利害打算的な妥協に依つてい

い加減に造り出されてはならないと見て居る。その意味に於ては妥協的な調停制や仲裁制の如きも排斥せらるべきもので、然かも調停制は中央集權的ならず、それは本來經濟の自己生存を顧慮するものであるが、労働關係はそんな考へから取扱を受くべきものでなく、全國家的立場と國家生活の本旨に立脚する裁判に依つて終局的決定を見るべきものだと思はれるのである。

然し裁判は當事者間の自發的解決の道の盡きたる後に於て初めて行はるべきものであるから、先づ經濟内部的な治平の道を講ずべき筈のものであつて、組合聯合會(federation)若しくは總聯合會(confederation)若しくはコルポラチオン(corporation)の手に依つて解決案を講ずべきものとせられる。そして結局裁判の行はれる場合には、裁判は、雇傭者及び被傭者の利益を考へ其の面目を立つると共に、より以上に生産の全部的利益を守り全局的な面目を立つることに努めるものである。要するに労働紛争その他社會問題一般は公事であると思はれる所から、公事なるが故に國家が之を治定するといふ態度を持する次第である。

労働裁判の判決の効力は、公認されたる勞資團體間の集合契約と同一の効力

判決の効力

を有する。その經濟的意義は労働代價の決定たる意義に解することが出来るから、従つてそれは利子及び利潤の決定に影響し、生産物の生産費に影響する次第で、つまり國權を以て經濟關係へ立入つた干渉を行ふことになり、自由主義經濟へ侵入して統制的經濟を構成することになる。そして労働裁判の行はれること、共に罷業と工場閉鎖とが禁止されることは、之を自由に放任することが國家單一的經濟觀念と根本的に矛盾し、フアッシュイズム觀念の破壊を意味するからである。従つて罷業及び閉出しは國家的全一性を冒瀆するものとして處罰せらるべきものと爲し、之を行ふものには罰金を課し、其の指導者、援助者、組織者には體刑を併課する。所謂公益企業に於ける罷業及び閉出しには體刑を課する。そして國民生活に對してより多き弊害を及ぼすものほどより重き刑罰を課するといふ主旨から、政治的罷業は最も重く之を罰せんとするものである。以てフアッシュイズムの見地と立場とを窺ふに足るであらう。(W. Heinrich, "Der Fascismus, Staat und Wirtschaft in neuen Italien, München 1932; J. S. Barnes, "Fascism, London 1931; C. Sforza, "Europäische Diktaturen, Berlin 1932, etc.)

第十八章 ナチスと社會政策

獨逸に於て表はれたる國民社會主義(Nationalsozialismus = Nazis)の思想と運動とは、其の根本觀念に於て伊太利のフアッシュヨと相似たるものがあるが、併し又同時に兩國々情と民族性の相違によりナチスの特色と見るべき所も少くない。先づ其の國家觀念に於ては兩者に極めて多くの共通點があるが、ナチスは特に其の民族的結合性に重きを置いて居る。

抑もナチスは國民(Volk)なるものを如何に見て居るかといふことから考へて掛からねばならぬが、之を以て民族の國家的に結合されたる有機體と見ることは、最初に認識さるべき所である。元來ナチスはあらゆる社會問題と政治問題とを其の自然的な原因に於て確めんと努むるものであつて、先づ之を其の生物学的な側から觀察することに依つて、解決の道を見出さんと試みるものである。そして今一の國民を自然的に與へられたる一の存在物と觀、あらゆる歴史的な由來や沿革等を暫く抜きにして考へるならば、ナチスが一國民を如何に見るか

ナチスと
フアッシュ
イズム

ナチスの
國民觀

といふ問題を知る爲めには、左の諸問題に對する其の解答如何を見ることが必要である。即ち如何なる理由が一國民を形成するに至らしめたか、如何にして其の内部的な又外部的な生存機能は造られたか、如何に其の機能は外存的な生存條件に依つて影響せられ、それに従つて一國民は繁榮し若くは繁榮し得ないかといふ諸問題これである。

この問題に對してはナチスは次のやうな考へ方を以て進まんとして居る。即ち人間は其の動物的進化に於て之を見るならば、生存上に於ける環境に適應する必要がある。従つて進化途上に於ける外的障礙に對しては鬭争する必要がある。生存の維持と進化との爲めには結合的な團體生活を營む必要もある。此の必要より自然的に生れ出づるものは家族制度的な結合であり、若くは氏族制度的 (Stamm) な結合である。そして其の結合の必要といふことは人間生存上の自然的な必要であるが爲めに、家族的結合や氏族的な結合は原始的な存在を有し、原始人類社會に於て既に之を見るのである。之を生物學的の必要に基くものと見る外はない。然るに進化の過程は、氏族の結合は進んで種族的結合

人類結合
生活の必要

結合の必要
其自然性
と其文化

(Stamm) となり又は民族的 (國民的) 結合となり、漸次に擴大して行くものであるが之れ亦自然的に然るものであつて、然かも其の結合は有機的なものとして發達して行く。同時に忘れてならないことは、其の必要は當初自然的なものであるが、漸次進化し行くと共に文化的な必要と化して行くといふことである。それは蓋し當初に於ける原始的生存條件は自然性に富めるものばかりであるが、其中に段々と發達するに伴つて生存條件が複雑になり文化的なものとなつて來るからである。

そして經濟史や文明史の教ゆる如く、原始的な人類の結合生活は非定住的であるが、之れも亦發達に伴つて定住的となる。定住的となるといふことは結合上に地域的要素が加味されるといふことであつて、茲に村落團體としての結合と、次で領域的な團結と、次で又國家的な結合が段々に進化過程として表はれて來るのである。

斯くの如く見る所から、ナチスは國民生活の自然性と有機性とを尊重し、之を高調するものである。従つてマルキシズムに於ける階級鬭争の理論に反對し、

民族的結合の重要

其の事實上に於ける不自然を指摘して措かぬ。仍て尙ほナチスの持する民族と人種とに關する見地を検討して見よう。

ナチスの世界觀は之を民族的世界觀と稱しても差支ないほどであつて、同一民族を以て同一國民を構成するのが、最も自然的で合理的であると見て居る。之を歴史的に觀察すれば、固より國民構成の有様は種々様々になつて居るけれども、元來近隣所住の同民族が結合して終に一國家を造り一國民となるのが、最も自然的である。然るに實際に於ては、征服や移住の結果として一民族ならざるものが一國家を造るやうになり、一國民中に様々の人種を含むことにもなるが、然し征服者の意圖は被征服者を搾取することを主眼とし、之を奴隸にするか搾取植民地を造るかが普通である。之と混血して同一民族とならうとする意圖はないのである。移住も亦必ずしも混血の目的の爲めに行はれるものではない。そして又大舉移住が行はれる際には、母國より分離して新に又自己民族を以て獨立なる國家を造らんとするのが其の希望であつて、白人植民地の實例に就いて之を見ても、黒人其他異人種異民族の排斥といふ事實が常に之に伴ひ

血の續き
血の感じ

發生して居る。そして同一民族の結合ほど自然的で又堅固なものはなく、血の續きといふことは、理論を超越し説明を用ひずして極めて強い吸引力であり結合力である。血の感じ (Blutgefühl) は感情であつて、理窟では如何ともすべからず、所謂血は水よりも濃きものである。従つて人間の社會的結合には自らに自然的な限度があり、それは血の續きの續く限り、血の續きの止る所といふこと、これである。然かも社會的結合は國家的結合として發達する外はないから、國家的結合の下に於ける國民は血の續いた同一民族から成立つといふのが、最も自然的でなければならぬ。

此の見地からして當然にナチスは國際的世界觀を否定し、特にマルキシズム流のインターナシヨナリズムに對して大反對である。即ち其の見る所を以てすれば、インターナシヨナリズムを主張し其の運動を行ふ輩は、人類の社會的結合に關する叙上の理を知らず、民族的意識の缺けたる者であつて、斯くの如き少數の人々が聲を大にして空虛な理論を述べ立て、熱狂的な運動を行ふのに、無自覺な盲從者共が之に隨從して走るのには洵に醜い圖である。されば其等の蠢動

インターナシヨナリズムの排撃

者輩も運動を行ふ内に少しづつ自覺して來ると、追々に其の運動から離れ、所謂轉向を爲して本然に立歸るのが例である。其の運動そのものが多くの自覺者から排斥されるのは固より當然である。元來インターナショナル運動者の努力は純政治的なものであるか、然らざれば純理論的なものであるか、然らざれば又純理想的なものに過ぎず、何れも物の自然性に立脚せざる空理空論たり架空的な理想であるから、自然性に對する認識が深まると共に克服せられるものである。併し平時に在つては人々はつきつめて物を考へないから、自然性も隠掩され易く、確な認識に達しないが、いざ非常時となつて眞剣に物事が考へられるやうになると、其の不自然性は直ちに暴露せられ、自然的な本然性が力を得て來るものである。

次に又全人類といふ觀念の如きも、抽象的なものに過ぎず、現實に於ては到底實勢力あるものたるを得ないと考へる。之に反して國家的なる生存そのものは現實なるもので、之を如何ともすべからざる靦面の事實である。然も民族的なる存在に至つては愈々現實的なもので、個人々々の存在が否定すべからざる

全人類と
いふ觀念と
の抽象性

文化の固
有性

事實であるが如く、民族の存在も亦否定すべからざる事實である。そして各民族は其の固有の力に依つて夫々の文化を造り出すけれども、其の文化的創造力には優劣と大小とがあるが、とにかく文化にはそれぞれ自然的に民族性が備はり、世界的に共通な文化といふものはなく、民族的な特色の存する所に文化の本質がある。即ち文化は民族固有の性格と能力とが具體的に表現したもので、或國民の文化、或る民族の文化が在る。然るに民族なるものは混合して又一の新民族の造り出される場合があるが、それは完全な人種的の混合の行はれた場合で、すべて動物は雜種が固定すれば一新種族となる。然し純血民族は混血民族よりも優れて居り、それ固有の美と固有の能力とを備へて居る。そしてその固有能力の成果が文化であるから、純血民族の文化は混血民族の文化よりも優秀であらねばならぬ。茲に民族の純粹性維持の必要が存し、民族若くは人種衛生學の必要重大である。又文化は遺傳するもので、之に關しても大いなる注意が拂はれねばならぬ。彼の猶太人排斥の如きも、此の見地に基いて理由づけられるのである。

同一民族によつて成立てる國家が堅實である如く、同一文化を基礎とする國家的共同生活は堅實である。文化といへばそれは社會學的な事實であり、國家といへばそれは法學的な事實であるが、前者を基礎とする後者は堅實である。そして文化といふ中には經濟が含まれ、經濟といふ事實も亦社會學的な事實である。然かもナチスに在つては、國家生活が尊重せられ、其の見解は新たなる國家主義を樹立すると稱せられるのであるから、國家と法との關係に關する其の見解に就いては、今少しく詳かに之を觀察して見なければならぬ。

ナチスの見る所を以てすれば、國家は一の法的形式(Rechtsform)であり、一定法規の上に國民に依つて築かれたる状態をいひ、それに依つて勞働の組織が造られ、各人の間並びに各人が全體に對して有つ法的要請權が設定せられる。所が其の法なるもの、基礎はといへば、それは元來人の心に存し、人心の奥深き倫理的動念が發露して法となるに外ならないと見る。其の點ファッショの見地によほど近似して居る。次に國家の目的はといへば、國民の力を全體としてより高き効果を齎らしめることに在る。されば全體の爲めには個人の利便を犠牲

法と其の
根源社會主義
的なるこ

にし其の自由を制限することも已むを得ない場合が少くない次第で、全體の利便即ち公共利益は個人の利便即ち私的利益に先行し優位するものである。然るに國家形式は非固定的なもので流動性をもつて居るから、個人の權利と全體の利害とは常によく調和するやうに努めらるべきもので、新しき状態に對しては常に新しき法的規範が必要とせられ、國民各個人の力を計畫的に組織化し之を集成する爲めに制度が必要とせられるのである。されば國家の任務は、全體としての國民の生存を保持し其の發展を爲すに適せしめるやう努むることに在るから、従つて地球上に一定地域を占據せしむることを要し、其の爲めには戦争も亦避くべからざる所であると見る。

然るに茲に注意すべきは、ナチスは一面國家主義的であるが、それはより多く民族主義的であり、同時に又それは自ら社會主義と稱し、民族主義を社會主義に依つて補充することの必要を説く點である。従つてナチスは單純なる愛國主義とは區別せらるゝを要し、彼等は社會主義的なることに依つてのみ國家的共同生活の有機的生存は可能なりと見んとして居る。されば其の見解に於ては

何となく國家といふ共同生存形態を手段的存在と見んとするの風があり、民族的生存が實體で其の形式として國家生存を理解せんとする風があつて、各個人を社會主義的な意義に於て相互に結合する爲めと、勞働を組織する爲めと、若者を教育する爲めと、國民の生活を保持する爲めとに國家的生存は必要なりと考へんとして居る。とにかく國家の自己目的性は之を否定せんと欲するのであつて、今後其の見解が如何に變化するかは豫測し難いが、今迄の所ではそんな風に考へて居る。

行政及び
立法觀

次に國家の行政に關しては、固より官吏による其の執行を認め、官吏に對しては十分なる給與を必要と見ると同時に、官吏の國家に對する十分なるサーヴィス心を涵養せなければならぬと見る。其代り官吏の名譽は之を保障すべしと説く。そして國家的國民生活體を有機體と見る見地からすれば、有機體に於ける神経系統の必要を認める意味に於て、國家生活の神経系統として國民代表を認めるが、然し政黨的議會を否認しデモクラシーを排撃すること、ファシズムに異ならない。併し議會を如何に組織すべきかに就いてはまだ定見がなく、其の

經濟觀

實行にも取りかかつて居ない。やはり伊太利風に職業代表的なものにせんとする主張も行はれて居る。

翻てナチスが經濟に對する見解として特色を發揮して居る點を見れば、先づ國防と經濟との結合を考へて居る點を挙げなければならぬ。ナチスは國防と經濟とは之を同一分母の上に置くべきものとし、國防なくしては經濟は安全に行はるゝを得ないと考へる。國防は國防の爲めに行はれるものでなく、經濟も亦經濟の爲めに行はれるものでない。兩者共に國民生存の爲めに行はれるもので、國民は生き且つ榮えんが爲めに經濟を營み、經濟を安全ならしめんが爲めに國防を爲すのであると解釋する。然るに經濟の基礎は之を農業に置くべきものなりといふ見地を持ち、農民と兵士とを密接に結合せしめる必要を認め、兵農主義を高調するのである。

兵農主義

農民經濟を確立することが最も必要だが、その爲めには農地の所有權を尊重する要ありと爲し、正當に得たる所有權は之を尊重すべきものと見るが、同時に又土地を正當に使用することは所有者の社會一般に對する義務なりと考へ、土

地を投機的に用ふることを禁止すべしと爲す。そして農村の疲弊は農民の離村より來るから、其の離村向都の原因を除去する必要ありと見、其の爲めには大都會を解體せしむるも可なりとまでの極論を見るのである。ナチスは大都市生活の罪惡と墮落を責むること甚しく、青年にはよろしく大都市の享樂生活を捨て、農村に於ける謙讓的な簡易生活を喜ぶやうな教育を施さねばならぬと主張し、未開地の開發と農村の建設との爲めには大移住計畫を立て、國民食糧の自給自足を實現すると共に、農本主義の實を擧ぐべしと主張するのである。

此の見地に關聯して保護政策も主張せられる。自國を以て自國民を養ふことが必要である限り、關稅に依る農業保護も必要なりとし、資本主義とボルシェヴィズムとのダンピングに對する自國産業の保護も必要で、資本主義的なる搾取労働に依る生産物とボルシェヴィズムの奴隸的な強制労働に依る生産物との競争に對して自國の自由労働を保護することは、實に必要已むを得ざる所だと説く。資本は國內に於ける國民を養ふ血でなければならぬ、國外に流出して資本制と労働奴隸制とを養ふてはならぬと力説するやうな有様である。

資本に對する見地

資本そのものに對してはナチスは總括的に之を否認する態度を取らず、生産資本は私的資本としても之を肯定するものであるが、貸付資本 (Leihkapital) に對しては極力闘争せんとする態度を示した。貨幣は元來經濟的交換手段たる性質を有するものであつて、それ自身財たるにあらず、従つてそれが高價な財として取扱はれるやうな實狀は甚だ不合理であると見る。ましてや之に依て労働者をして其の労働を成るべく高價に賣らざるべからざらしむる實狀に陥らしめたる如き經濟界の實際關係の造り成されるといふことは、不都合極まれるものだと理解する次第である。貨幣は國民經濟を養ふ血液たらしむべし、之を以て搾取絞血の手段たらしむべからずと主張する。此の見地よりして金融資本の跋扈を抑へんと欲し、銀行業に對しては國家管理の必要を認め、之によつて利子奴隸制を克服せざるべからずと説くのである。けれども利子一般を否認するわけではなく、生産資本とか經營資本とか見らるべきものは之を承認すると共に、其の利子を承認するが、但しその利子歩合は十分低廉ならしむべきものとし、之に依る不勞所得を排除せんと欲するのである。金本位制に關しては理論

的に之に抗泥せず、國際的本位觀念は之を捨て、國內の爲めに國土に立脚せる新貨幣制を樹立すべしとも説いて居る。

次に生産に關する企業組織に就いては、一概に之を否定することなく、之による私的イニシアチヴを尊重せんと欲するが、大企業の普及により中小企業が没落し、中産階級の疲弊を齎すことに對しては、社會的に甚だ好ましからずと爲し、コンツェルンやトラストなどの如き大企業組織には寧ろ反對で、テーラー、システムなど云はれるやうな人間を機械化するものは勿論之を排斥し、人間の精神的活動を重んじ、特に發明力を十分に涵養せなければならぬと見る。手工業の如きは機械生産に比して成程幼稚なものには相違ないが、然し文化の創造力は多分に其の間に含まれて居り、獨逸文化が中世手工業に負ふ所は最も多大で、當時から延いて今日に至る其の功績は幾ら尊敬してもし切れぬ程だと力説し、文化の最も重んずべきを信ずる既述の見地から、文明を促すとも文化を造り得ない大企業を卑み、文明の進歩には貢獻する力十分ならずとも高き文化を生む中小生産組織を重んぜんと欲し、文明は文化の足しにならないと説くのであ

企業に對する見地

中小企業
の尊重

る。併し乍ら大企業と雖も一概に之を排斥すべきものでもなく、之を撲滅すべきものにあらず、大量的に均一製品を生産する爲めには適當であり、又大機械や大機關などを造る爲めにも必要なものだとして居る。そして注意すべきことは、ナチスはマルキシズムと異り大企業化は必ずしも時勢の必然的な傾向にあらずと見、之を不可避的な傾向として袖手傍觀するは許されぬことだと信じて居る點である。

大體ナチス運動は右述の見地からもわかるやうに、やはり一種の中産階級運動であつて、舊來の中産階級を維持する必要を考へると同時に、新興の官公吏、サラリーマンなどの中等階級を保護すべき見地を持し、其の點イタリーのファッシヨと頗る共通な所がある。この見地からしてナチスは産業の適當なる分布を必要と考へ、大中小企業の適當なる組合はせと同時に、大工業の地方的なる分布をも必要と見る。従つて又百貨店や消費組合などの如きが餘り發達して、獨立なる中小商人を亡ぼすを憂ひ、獨立商業の維持せざるべからざる必要を説き、百貨店や大消費組合の從屬的なる使用人よりも、獨立なる中小商人は社會的に

中等階級
運動たる
色彩

尊重すべき存在であると考へ、中世の名譽を重んじたる獨立商人を同顧し、ハンザ同盟諸都市の獨立商人の尊むべく慕ふべきを述べて、かゝる精神による現代の時弊救治を希ふて止まないものである。

然しナチスの見地は頗る實際的であつて、従つて理論的には極めて妥協的であり、極端な議論を唱へるやうであり乍ら、一概に片寄つた主張をするものでなく、又觀念に拘泥し理論を信條化することに於ても、マルキストのやうでない。試にその例示たるべきものを挙げれば、例へば機械に對する見地の如きも、一概に之を呪ふべきものと見ず、人間の辛苦を助け勞役を軽減する機能認むるに吝かでない。たゞ機械に依つて餘りに人間そのものを機械化することを嫌ひ、之を避くべきものとすると同時に、機械使用の普及による失業の増加を恐れて居る。それで其の見所によれば、多數人は野に在つて働け、少數人は機械を用ひて働けと叫ぶが如く、農業を基本として適當に工業を之に加味することを以て、健全な産業状態と見んとするのである。そして機械化が人間の思考力を弱からしめることを憂ふること大で、結局政策の大方針としては、人々を幸福にす

對機械觀

賃銀に對する見地

るよりもより以上に人々の考へる力を涵養することに重きが置かれねばならぬと主張するのである。

次に賃銀に關しては、正當なる勞働に正當なる賃銀を支拂ふといふことを以て大原則と考へ、賃銀は最低生活費に一致するといふやうなリカード一流の見地を喜ばず、最低生活費の觀念の如きは不確實なもので、民族の異なるによつて相異し、又一國內に於ても地方的に相違あるを免れず、そんなものが賃銀決定の根本となつては宜しくないから、賃銀は須らく勞働者が文化人らしい生活を爲し得るやうに之を保障する程度のものたらしめざるべからずと見る。そして勞働者の企業參加權の如きも之を是認し、勞働全收權の主張をも肯定せんと欲し、株主の不勞所得を廢除せんと希望するのである。

一般經濟觀

要するに敍上の如き見地からして、ナチスは經濟一般に關しては前に述べたやうに、經濟の爲めの經濟は存在しないと見る。經濟は要するに身體の營養作用に過ぎずと考へ、血と土地とが基本であり、人々は土に親み土を尊重し乍ら其の上に働き、又汗と油とを元手に働く所に貴さがあり、生存を奢侈と逸樂とに導

くが如き經濟はほんとの人生に即した經濟にあらずと見るのである。此の見地からして奢侈的な資本主義を否認し、逸樂的な資本主義を否定せんとするのである。そして健全にして人生の眞意義に合致せる經濟を造り社會生活を實現せざるべからずと主張する所から、持に多く其の建設の爲めに青年に望を掛け青年に將來を約束すると共に其の訓練の必要を痛感し、一大青年運動によつて自由と名譽と正義と(Freiheit, Ehre und Gerechtigkeit)を實現せんと期する次第である。

尤もナチス運動は今進行の途中に在るから、其の主張は時の必要に應じて多少づつ變化しつゝあり、従つてその説く理論の如きも終始常に上に述ぶる所の如きものとして持續されるわけではない。考へては動き動いては考へ、理論が運動を導くと共に、實地行動が後に理論づけられる實狀を呈してゐる。之は實際運動としては已むを得ない所であるが、然しその大根本を爲す見地に至つては、然かく常に動搖するものでなく、ファッショに於けると同様に、現今の時弊を痛感すると共に、之を矯正すべき國家主義的若くは民族主義的なる社會本位觀

ナチスの
今後奈何時勢の
所向

を立て、之を守つて個人主義の是正を企てゝゐるものである。従つて其處には大いなる社會政策的見地の之に伴ひ進みつゝあるは當然であつて、社會改善の實を所謂政策の範圍内に於て行ふか、社會運動又は政治運動として社會的改革を行ふと共に、之を以て政策の本道となし、其の道の通ずるに連れて政策の立法化と行政的實現を期するか、其所の所が多少行き方の相違として表はれるだけのことである。然かも惟へば、現今の時勢は後者の傾向を著しからしめつゝあるやうである。社會政策の觀念も之に連れて擴大せなければならぬであらう。(P. Ling, -Nazionalsozialismus, Berlin 1932; W. Scheunemann, -Der Nationale Sozialismus, Berlin 1931; Ad. Hitler, Mein Kampf; H. Diebow u. K. Goelsger, -Hitler, Berlin 1931; E. Czech-Jochberg, -Hitler, 1930; W. Lewis, -Hitler, London 1931, etc.

社會政策原論 大尾

索引

A

Amon, A. 二四三
Autocracy 二四三

B

Borgh, van der 二四三
Bauermeister, M. 二四三
平等觀(思想) 二四三
母性保護 二四三
分配政策 二四三
辯證法 二四三
ホルシェヴィズム 二四三
ビスマーク 二四三

C

索引

賃銀の公平原則 二四三

賃銀政策 二四三

賃銀基金説 二四三

賃銀鐵則 二四三

賃銀所得 二四三

地方團體の社會政策 二四三

地代所得 二四三

仲裁々判制 二四三

中等階級政策 二四三

中産階級運動 二四三

調停制度 二四三

Carta del Lavoro 二四三

D

團體主義 二四三

團體契約 二四三

道徳的價值 二四三

同等價値の原則 二四三

同等犠牲の原則……………三〇

同業組合……………三〇

奴隷制度……………七一

デモクラシー……………一四、四、四、三、二、一〇

F

婦人問題……………六

負傷保険……………七

不變資本……………一六

フアッシュイズム……………二四、二六

フアッシュヨ運動……………二四

G

Gunther, E.……………三三

Goldscheid, R.……………三三

議會主義(政治)……………一四、一四、一四、一四

H

Heyde, L.……………三

法律的價值……………三

比例的公平(對等)……………六

保健施設……………七、六、七

保險政策……………三

保險組合……………一五

癱疾保險……………七

八時間労働(制)……………二六

封建制度……………一八

罷業禁止……………一八、二七、二七

百貨店……………二八

I

遺族保險……………三

Industrial councils……………一八

Industrial agreement……………一八、二六

イタリアニタ(Italiania)……………三

インターナショナルイズム……………二七、二七

J

自己責任(主義)……………八、九、一〇、一一

自由主義……………一七、三九、三六、三六

自由主義經濟……………九、二八、三五

實踐的科學……………四

人道主義……………四

人格主義……………四

人口政策……………七

住居政策……………六、七

K

階級

階級……………三、四、六、三、三、六、四、三、〇、九、一、三、一、六、一、七、一、八、一、九、一〇、一〇、一一

階級闘争……………一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、一二六、一二七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一

階級的エゴイズム……………一七

階級意識(自覺)……………一七、三〇、三三

勤勞者階級……………七

勤勞所得……………三、三、三、一、六、一、六、三、六

個人主義……………一〇、三、六、四、四、一、九、三、四、八、二、八

個人主義經濟……………九、九

共產主義……………一五、三三、一、三、四、三、九

共產宣言……………一〇

共產勞動黨……………三

共同組合國家……………二六

經濟政策……………一七、三、七、九、三、一、一〇、一、一三、一三、一三、一三、一七

經濟的價值……………四

經濟生物學……………五

經濟法則……………一〇、二八、三〇

經濟方法(生産方法)……………三

雇傭關係……………一八、三

公共善……………一

國家主義……………六、九、三、三、六、六、六、六

國民所得……………一〇、一〇

國際社會政策……………一四
 國際聯盟……………一四、一四、一四
 國際勞働局……………一四、一四、一四
 國際勞働保護法……………一四
 國體觀念……………一七
 國家資本主義……………三三、三三
 國營主義……………三三
 國民社會主義……………三三
 國家(Volk)……………三三
 企業制……………九
 企業參加權……………二七
 古典派經濟學……………一〇、一〇、一〇、一〇
 小作政策……………一四
 家族貸銀制……………一四、一〇
 家族貸銀制……………一四、一〇、一〇、一〇
 高貸銀策……………三三、一六
 健康保險……………一〇
 給料所得……………一六

革命的團體……………一八
 組合國家……………一八
 可變資本……………一九
 計畫經濟……………三三、三三
 カルテル……………三九
 カヴァール……………三九
 貨幣……………三三、三三
 金融資本……………三六
 コンツェルン……………三六
L
 Labour board……………一八
 Lenin (Leninism)……………一〇

M
 無産(者)階級……………一八、一八、一八、一八
 マルキシズム……………一八、一八、一八、一八
 一七、一七、一七、一七

N
 民主主義……………三三、三三
 民族主義……………三三、三三
 民族國家……………三三
 民族衛生學……………三三
 マンチェスター學派……………三三

農村問題……………六
 農業會議所……………一四
 農本主義……………三三
 人間經濟……………三三
 Nep……………三三、三三、三三
 Neonep……………三三
 Nationalsozialismus-Nazis……………三三
 ナチス……………三三、三三

O
 應用的科學……………三三

オートクラシー……………一四
P
 Pribram, K.……………一四
 Pathoff, H.……………一四
 プチブルジョア……………三三、三三
 プロレタリア國家……………三三
 プロレタリア經濟……………三三

R
 勞働問題……………七
 勞働政策……………七、四一
 勞働者階級……………一八、一八
 勞働組合……………一八、一八、一八、一八
 勞働保護(法)……………七、六、七、六、七、六、七、六
 勞働保險……………七、三三
 勞働時間制限……………七、六、七、六、七、六、七、六

勞働會議所……………一四九
 勞働價值說……………一七一
 勞働者自助運動……………一八三、一八五
 勞働爭議……………一八四
 勞働豫備軍……………一八六
 勞働憲章……………一八七
 勞働裁判……………一八七、一八八
 勞働全收權……………一八七
 老年保險……………一八七
 歷史派經濟學……………一八八
 利子所得……………一八八、一八九
 利子奴隸制……………一八九
 累進所得稅……………一八九
 リカード—賃銀說……………一八九

S
 社會政策的規範……………一
 社會政策學……………三

社會的連帶觀念(主義)……………一〇
 社會主義(者)……………一五、七、九、三三、三五、三六、四〇、七九
 社會本位觀……………一六
 社會正義……………四一、三三
 社會保險……………六八、二九
 社會法則……………一〇六
 正義……………五、四〇、四一、三五、三九
 鮮人問題……………五
 水平社問題……………六
 資本主階級……………八、九五
 資本制(主義)……………九七、一〇三、一〇九
 資本集中……………一六
 審美的價值……………四
 生產力說……………四
 生產合理化……………二四、二五
 生產政策……………三三、三七
 生活賃銀制……………一〇
 生產方法(經濟方法)……………三

商工會議所……………一四九
 職業相談(所)……………一四九
 職業紹介……………一四七、一四八
 職業組合……………一三八
 疾病保險……………一三八
 失業(者)……………一三六、一三七
 失業保險……………一七、一四七、一四九、一〇
 最低賃銀制……………一六、一四一〇
 自然主義……………一〇
 自然法則……………一〇、一〇六、一〇七、二四
 政黨……………一五、一四、二〇
 氏族制度……………一八、二〇
 相續稅……………一八
 奢侈稅……………一八
 消費組合……………一八、一八、二五
 爭議調停制……………一八
 產業組合(運動)……………一四、一六
 產業協定(約)……………一七、一六

私有財產制(所有制)……………一五、一六、一六、一六
 スターリン……………三三、三三
 戰時共產主義……………三八
 新國家主義(運動)……………三四、三五、三八
 新中等階級……………三三
 サンチカリズム……………三三、三六
 專制政治……………三三
 三權分立……………三三
 State corporation……………三三
 集合契約……………三三、三三
 種族的結合)……………三三
 T
 統制經濟……………九、九、三三、三三、三四
 土地政策……………一〇
 土地增價稅……………一八
 黨派……………三三
 トラスト……………一六、三三、三九、六四

Trade board.....一八

W

Weddigen, W.二四、四一、七一、八三
 Wiese, L. V.二五
 Weber, A.七、一七
 Wagner, A.八
 Westphalen, T. A.三、七、一三

Y

有産(者)階級.....八、一五、一八
 雇主組合.....一四、一五
 唯物史觀.....二七、三三、三九、四〇、四七
 唯心論.....一〇一
 唯心的史觀.....一〇七
 ユートピアン、ソシアリズム.....一三
 餘剩價值(論).....一七、一九
 猶太人排斥(運動).....二四、二七

Z

Zwiedineck-Südenhorst.....三
 財物經濟.....三、五、一五、一六、一七
 財政政策.....一三
 財產所得.....一五、一六
 財產制.....一三、一四、一六、一七

索引終

昭和九年十月十五日 昭和九年六月廿五日 昭和九年七月七日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日
初版印刷 再版發行 發行	初版印刷 再版發行 發行	初版印刷 再版發行 發行	初版印刷 再版發行 發行
昭和九年十月十五日 昭和九年六月廿五日 昭和九年七月七日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日	昭和十二年六月廿三日 昭和十三年六月廿五日 昭和十三年六月廿五日
發行所	發行所	發行所	發行所
發行所	發行所	發行所	發行所
發行所	發行所	發行所	發行所

所有權者 著作 發行者 印刷者

河田 嗣 郎
 江草 重 忠
 龜谷 良 一

社會政策原論
 定價貳圓五拾錢

(外地定價二圓七十五錢)

發行所 書肆有斐閣

東京市神田區神保町二丁目十七番地
 電話九段三三三・三三三
 振替口座東京三七〇
 東京市本郷區大正門前
 電話小石川一九二〇番

東京市神田區神保町二丁目十七番地
 電話九段三三三・三三三
 振替口座東京三七〇
 東京市本郷區大正門前
 電話小石川一九二〇番

有斐閣

東京市神田區神保町二丁目十七番地

大 阪 商 大 學 長 法 學 博 士
河 田 嗣 郎 著

社會問題體系 全八卷

第一卷	社會問題總論	送料二七〇
第二卷	賃金制及利潤分配制	送料三〇〇
第三卷	労働組合論	送料三〇〇
第四卷	労働争議及調停制度	送料三〇〇
第五卷	新賃金政策	送料三〇〇
第六卷	社會保險論	送料三八〇
第七卷	中等階級問題及サラリーマン問題	送料三二〇
第八卷	農村問題	送料三二〇

補増 農業經濟學 上製 送料 九〇〇

本書は博士が多年研究の結果に成る大著にして、實に我が學界に於ける新學の最高權威者である。既に第四版發賣に際し著者は其後の研究に成る、「北米合衆國の聯邦農場貸付制度」の一節を増補し更に巻末へ全編に互る索引を挿入せらる。

社會問題の意義は明瞭ならざるに加へて、之に關する研究も亦從來十分に學問的體系を完成し得ない状態である。本書は博士が労働問題を中心に社會問題の理論と實狀とを明かにし、併せて政策上の考案を述べられしものであつて、各冊は何れも獨立の項目としての整つた優れた研究である。

1953. 2. 28

